鳥取県教育文化財団調査報告書52

県営西伯地区広域農道整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書II

鳥取県西伯郡岸本町

KOMACHIISIBASINOKAMI

小町石橋ノ上遺跡

鳥取県西伯郡会見町

ASAKANE　TASUMIOKEGAWA　TASUMI

朝金第2遺跡・田住桶川遺跡・田住第8遺跡

1997

財団法人　鳥取県教育文化財団

鳥取県教育文化財団調査報告書52
県営西伯地区広域農道整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ
『小町石橋ノ上遺跡・朝金第２遺跡・田住桶川遺跡・田住第８遺跡』正誤表

９ページ	第４図周辺遺跡分布図遺跡名対照表		
誤	13　小町越野原第002遺跡(0348)	正	13　小町越城野原第002遺跡(0348)
	14　小町越野原第001遺跡(0349)		14　小町越城野原第001遺跡(0349)
20ページ	２行目		
誤	須恵質の円筒埴輪片である。	正	埴質の円筒埴輪片である。
22ページ	・テラス状遺構の５行目		
誤	内面の頸	正	内面の頸
43ページ	14行目		
誤	越敷野原第２遺跡	正	小町越城野原第２遺跡
44ページ	３行目　（註７）		
誤	下野原遺跡	正	下ノ原遺跡
131ページ	第103図遺物実測図右下の土器の図		
誤	（遺物番号無し）	正	377

序

鳥取県西部地域においては、近年幹線交通網の整備も進み、秀峰大山を背景とした大規模なリゾート開発が積極的に取り組まれております。一方で、地元産業の育成、整備に向けての取り組みも活発で、観光と産業の両面で今後さらなる発展が期待される地域であります。「鳥取県全県公園化構想」のもと、拠点的施設として、会見町、岸本町、溝口町一帯にまたがる越敷野地区に、県立フラワーパークの建設が進められており、美しい自然環境に恵まれた越敷山系は、さらなる発展を遂げようとしております。越敷野は、旧伯耆国会見郡の郡衙推定地とされる長者原台地を目前に望み、古代においては政経、文化の中枢として繁栄した地域であります。近年の開発に伴い、埋蔵文化財の発掘調査件数もにわかに増加しており、越敷野の成り立ちを物語る遺跡が数多く発見されております。

当財団では、県営西伯地区広域営農団地農道整備事業に伴い、平成８年度に鳥取県から委託を受けて、鳥取県教育委員会の指導のもと、西伯郡岸本町及び会見町地内において、埋蔵文化財の発掘調査を実施し、記録保存に努めてまいりました。調査の結果、縄文時代から江戸時代にいたる多数の遺構、遺物が確認され、当地域の歴史の長さをあらためて認識することとなりました。近世農村の集落構造の解明にあたっては、従来考古学的資料が希少であり、今回の江戸時代の集落や土葬墓の発掘調査によって、貴重な資料が提供されるものと考えます。本発掘調査の成果が、今後の調査研究の一助となり、多くの方々に活用していただければ、幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査に際しまして、多大なご協力をいただきました地元の皆様をはじめ、ご指導いただきました方々、そのほか関係各位に対し、心から感謝申しあげます。

平成９年３月

財団法人　鳥取県教育文化財団
理事長　田　淵　康　允

例　言

1．本報告書は、「県営西伯地区広域営農団地農道整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査業務」に伴い、平成８年度に鳥取県西伯郡岸本町小町及び会見町田住地内で実施した、埋蔵文化財発掘調査記録である。

2．本発掘調査は、鳥取県農林水産部及び米子地方農林振興局の委託を受け、財団法人鳥取県教育文化財団が実施した。

3．本発掘調査は、下記の遺跡を対象として実施された。
　小町石橋ノ上遺跡（鳥取県西伯郡岸本町大字小町字石橋ノ上586外所在）
　朝念第２遺跡（鳥取県西伯郡会見町大字田住字上桶川718外所在）
　田住桶川遺跡（鳥取県西伯郡会見町大字田住字桶川6731外所在）
　田住第８遺跡（鳥取県西伯郡会見町大字田住字門田802－3外所在）

4．本発掘調査の実施にあたっては、人骨取り上げの現地指導および人骨の鑑定を鳥取大学井上貴央先生、土器の胎土分析を奈良教育大学三辻利一先生、木製遺物の樹種鑑定を鳥取大学吉川郁夫先生、石製品の石材鑑定を鳥取大学赤木三郎先生、放射性炭素年代測定を京都産業大学山田治先生にお願いした。
　また、井上貴央先生、三辻利一先生、山田治先生には、本報告書に御寄稿いただいた。明記して、各先生方に深甚の謝意を表します。

5．本書掲載の「文政六年會見郡住吉村地絵図面帳」抜粋については、絵図面帳の所有者加藤勇二氏より貴重な資料をご提供戴き、本書への掲載にあたってはご高配を賜った。明記して、深甚の謝意を表します。

6．本発掘調査の実施にあたっては、土壌分析をパリノ・サーヴェイ株式会社、調査地内の測量および基準杭の設定をシンワ技研コンサルタント株式会社、ラジコンヘリコプターによる空中写真撮影を昭和株式会社（小町石橋ノ上遺跡）、スカイサービス（田住桶川遺跡）にそれぞれ委託して実施した。

7．発掘調査によって作成された記録類は、鳥取県埋蔵文化財センターに保管されている。出土遺物は、小町石橋ノ上遺跡出土分は岸本町教育委員会で、他３遺跡出土分は鳥取県埋蔵文化財センターで保管されている。

8．本報告書の作成は、調査員の協議に基づいて執筆、編集し、執筆担当者は目次に記載した。本報告書に掲載した実測図、写真図版は、西部埋蔵文化財西伯地区広域農道調査事務所で作成した。遺物の実測、拓本、浄書は、山崎裕子、畑さおり、小原円が担当し、遺物の写真撮影は、中森祥が担当した。遺構図の作成は調査員があたり、その浄書は左藤博が担当した。

9．発掘調査から報告書作成にいたるまで多くの方々からのご指導、ご助言、ご支援をいただいた。明記して、深謝いたします。（敬称略、順不同）

井上貴央　三辻利一　古川郁夫　赤木三郎　山田　治　南　博史　村上忠喜　影岡優子　土井浩二　岡田龍平
瀬田光範　高橋　稔　富長多美子　米澤勝雄　新井宏則　後原　敏　赤見高好　遠藤和子　下高瑞哉　小林勝重
加藤勇二　加藤要子　福山行雄　赤井繁美　小林国弘　兼次静夫　会見町　会見町教育委員会
岸本町　岸本町教育委員会　米子市史編さん事務局

凡　例

1．本報告書における方位はすべて真北を示し、レベルは海抜高である。Ｘ＝、Ｙ＝の数値は、国土座標第Ⅴ系の座標値である。

2．本報告書において採用した遺構の略号は、次のとおりである。
　ＳＩ：竪穴住居跡　　ＳＳ：テラス状遺構　ＳＢ：掘立柱建物跡　ＳＤ：溝状遺構
　ＳＫ：土抗、土壙墓　ＳＥ：井戸　　Ｐ：柱穴

3．遺物実測図のうち、須恵器、焼締陶器は断面黒塗り、瓦質土器は断面網掛け、それ以外のものは断面白抜きで表した。

4．遺物実測図における縮尺は、下記のとおりである。
　土器、土製品、埴輪－１／３、瓦－１／３or１／４、剥片石器－１／１、礫石器－１／３、石塔－１／４、石塔片－１／３、金属製品－１／２、木製品－１／２or１／３

5．本文中、挿図中および写真図版中の遺物番号は一致する。

6．遺物番号は、本報告書中を通じて通し番号である。

目　次

序
例言
凡例
目次
写真図版目次
第１章　発掘調査の経緯 …… 1
　第１節　発掘調査に至る経緯 ……（北浦）… 1
　第２節　発掘調査の経過と方法 ……（北浦）… 2
第２章　位置と環境 …… 4
　第１節　地理的環境 ……（上田）… 4
　第２節　歴史的環境 ……（上田）… 5
第３章　小町石橋ノ上遺跡の調査 …… 8
　第１節　位置と環境 ……（中森）… 8
　第２節　調査の経過と方法 ……（中森）… 8
　第３節　遺構と遺物 …… 13
　　1　概要 ……（中森）… 13
　　2　尾根上の調査 ……（中森）… 13
　　3　尾根裾部の調査 ……（中森）… 22
　　4　遺構外の遺物 ……（中森）… 34
　第４節　小結 ……（中森）… 37
　第５節　竪穴住居跡ＳＩ－２の液体シンチレーション絶対測定法による"Ｃ年代測定結果
　　…… 京都産業大学　山田　治… 45
　第６節　小町石橋ノ上遺跡における古環境復元 ……パリノ・サーヴェイ株式会社… 46
第４章　朝金第２遺跡の調査 …… 55
　第１節　位置と環境 ……（上田）… 55
　第２節　調査の経過と方法 ……（上田）… 56
　第３節　遺構と遺物 ……（北浦）… 59
第５章　田住桶川遺跡・田住第８遺跡の調査 …… 67
　第１節　位置と環境 ……（北浦）… 67
　第２節　調査の経過と方法 ……（北浦）… 67
　第３節　遺構と遺物 …… 70
　　1　概要 ……（北浦）… 70
　　2　墳墓の調査 …… 72
　　・土壙墓、木棺墓の概要 ……（北浦）… 72
　　・石棺墓の概要 ……（北浦）… 76
　　・土壙墓、木棺墓、石棺墓の時期と遺構外出土遺物 ……（北浦）… 89
　　・近世墓 ……（中森）…105
　　3　集落部の調査 ……（北浦）…124
　第４節　小結 ……（北浦）…142
第６章　考察 …… 145
　第１節　小町石橋ノ上遺跡、朝金第２遺跡、田住桶川遺跡、田住第８遺跡出土土器の蛍光Ｘ線分析
　　…… 奈良教育大学　三辻利一…… 145
　第２節　田住桶川遺跡における弥生時代の墓制について ……（北浦）…149
　第３節　田住桶川遺跡の近世墓について …… 151
　　1　田住桶川遺跡から検出された近世人骨について
　　…… 鳥取大学　井上貴央・影岡優子・上井浩二…151
　　2　田住桶川遺跡における近世墓の様相 ……（中森）…156
写真図版
報告書抄録

写真図版目次

小町石橋ノ上遺跡（ＫＩＢ）
図版１　小町石橋ノ上遺跡・調査前・全景・土壇状遺構下層検出遺構全景
図版２　土壇状遺構・ＳＤ－１、２、４、５
図版３　ＳＫ－１、３～５
図版４　ＳＫ－６～９
図版５　尾根断部全景・ＳＳ－１～３、ＳＤ－６～10
図版６　ＳＳ－１、２・ＳＤ－８～11
図版７　ＳＫ－10～12・ＳＢ－１
図版８　ＳＩ－１～３
図版９　ＳＩ－３
図版10　花粉化石・植物珪酸体

朝金第２遺跡（ＡＧ２）
図版11　調査前・全景・ＳＫ－１、２
図版12　ＳＫ－３～７
図版13　ＳＫ－８～10・作業風景

田作桶川遺跡（ＴＳＯ）
図版14　全景
図版15　調査前・ＳＫ－１、２
図版16　ＳＫ－３、５、６、８
図版17　ＳＫ－９～11
図版18　ＳＫ－11、12
図版19　ＳＫ－12、13
図版20　ＳＫ－14・土壙墓群
図版21　ＳＫ－15、16
図版22　ＳＫ－16～18
図版23　ＳＸ－１
図版24　近世墓群・ＳＸ－１・ＳＫ－19
図版25　ＳＫ－20～22
図版26　ＳＫ－23、24
図版27　ＳＫ－25～27
図版28　ＳＫ－28、29
図版29　ＳＫ－28、29
図版30　ＳＫ－28～31
図版31　ＳＫ－30～33
図版32　ＳＫ－34、36、37
図版33　ＳＫ－38

田作第８遺跡（ＴＳ８）
図版33　ａ、ｂブロック調査前・ａブロック客土層
図版34　ｃブロック調査前・ＳＳ－１、２
図版35　ＳＫ－１～３・ＳＤ－２
図版36　土壇状遺構・ＳＳ－７～10・ＳＥ－１
図版37　ＳＥ－１、２・ＳＳ－４～６

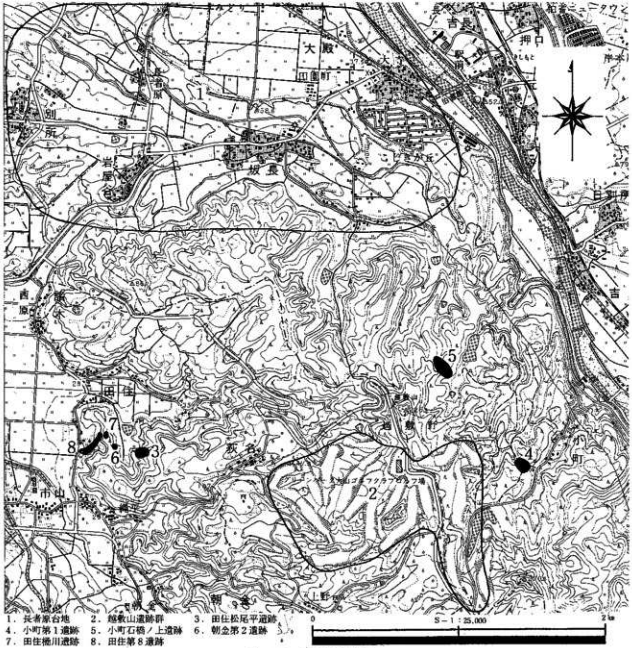
遺物写真
図版38～40　小町石橋ノ上遺跡出土遺物
図版41～45　田作桶川遺跡出土遺物
図版46　朝金第２遺跡出土遺物
図版46～48　田作第８遺跡出土遺物

第１章　発掘調査の経緯

第１節　発掘調査に至る経緯（第１図）

本発掘調査は、鳥取県により進められている県営西伯地区広域営農団地農道整備事業を原因とし、西伯郡岸本町地内及び会見町地内において工事予定地内に存在する埋蔵文化財の記録保存を目的としたものである。当該農道は、西は西伯町に端を発し、会見町を通過して、東は岸本町に至る路線である。農道の整備事業における埋蔵文化財の保護と事業計画との調整については、事業計画策定に伴って関係機関間で協議され、以後当該町教育委員会によって分布調査が実施されてきた。

農道が建設される越敷山系は、従来より遺跡密集地域として把握されており、縄文時代から近世にいたる遺構、遺物が多数確認されている。旧伯耆国会見郡の郡衙推定地とされる長者原台地（第１図１）の後背部にあたり、古代においては政経、文化の中枢として繁栄した地域である。平成元年にはゴルフ場建設工事に伴い、岸本町、会見町両教育委員会によって越敷山遺跡群（第１図２）が発掘調査され、約150棟の竪穴住居跡、約340基の落と



1．長者原台地　2．越敷山遺跡群　3．田住松尾平遺跡
4．小町第１遺跡　5．小町石橋ノ上遺跡　6．朝金第２遺跡
7．田住徳川遺跡　8．田住第８遺跡

第１図　調査遺跡位置図

し穴状遺構など多数の遺構が検出されている（註１）。

本農道整備事業に係るものとしては、平成７年度に会見町教育委員会が、田住松尾平遺跡（第１図３）を発掘調査し、落とし穴状遺構40基と弥生時代後期の集落跡を検出している（註２）。同年、鳥取県教育文化財団が岸本町地内で小町第１遺跡（第１図４）を調査し、落とし穴状遺構26基を検出している（註３）。

今回の発掘調査地については、岸本町教育委員会及び会見町教育委員会により遺跡の有無、範囲等を確認する事前の試掘調査が行われ、埋蔵文化財の存在が確認されたものである（註４、５）。これを受けて、鳥取県農林水産部及び米子地方農林振興局は、鳥取県教育委員会と協議し、記録保存のための事前発掘調査を財団法人鳥取県教育文化財団に委託した。岸本町所在の小町石橋ノ上遺跡（第１図５）と会見町所在の朝金第２遺跡（第１図６）、田住桶川遺跡（第１図７）、田住第８遺跡（第１図８）の４遺跡が調査対象遺跡となった。これにより平成８年度に、西部埋蔵文化財西伯地区広域農道調査事務所が調査を担当することとなった。

第２節　発掘調査の経過と方法

発掘調査の対象遺跡は、岸本町所在の小町石橋ノ上遺跡（Ｅ地区）［ＫＩＢ］と会見町所在の朝金第２遺跡（Ｃ地区）［ＡＧ２］、田住桶川遺跡（Ｂ地区）［ＴＳＯ］、田住第８遺跡（Ａ地区）［ＴＳ８］の４遺跡である。調査中は、各遺跡に便宜上の地区名を付し、これを使用した。（　）内に示した地区名がこれにあたる。また田住第８遺跡については、調査進行の便宜上さらに３区に細区分し、それぞれａ～ｃブロックと称した。遺跡名の略称については、上記各遺跡の地区名の次項の［　］内に記している。

調査地が広域に渡るため、当初、調査班を岸本町地内と会見町地内に分けて同時進行とし、岸本町地内での調査が終了後は、会見町地内での調査に合流し、体制を１本化した。

平成８年４月より調査を開始し、岸本町の小町石橋ノ上遺跡と会見町の朝金第２遺跡から着手した。７月に朝金第２遺跡の調査が終了し、引き続き田住桶川遺跡の調査に移行した。途中、表土除去の便宜上、田住桶川遺跡の調査を中断し、田住第８遺跡の調査に移った。９月には小町石橋ノ上遺跡の調査が終了し、調査班が田住第８遺跡の調査に合流することとなったため、田住桶川遺跡の調査を再開した。11月には両遺跡での遺構検出作業が終了、引き続き測量作業を行い、現場作業を12月に終了した。その後平成９年３月まで、調査成果の纏めを行った。遺跡ごとの詳細については、各章にそれぞれ記述した。なお発掘調査は、下記の体制で行われた。また各遺跡の遺構名の新旧対象（新：本書中使用遺構名－旧：調査中使用遺構名）は、次表のとおりである。

調査体制

調査主体　財団法人鳥取県教育文化財団

理事長　田淵康允（鳥取県教育委員会教育長）

常務理事　森田哲彦（鳥取県教育委員会教育次長）

事務局長　岩本武夫

財団法人鳥取県教育文化財団鳥取県埋蔵文化財センター

所長　宮谷正信（鳥取県教育委員会文化課長）

次長　八木谷昇

調整係長　久保儀二朗（鳥取県埋蔵文化財センター調査指導係長）

調査員　亀井照人　小谷修一

庶務係主任事務職員　欠部美恵　主任事務職員　谷口幹彦

調査担当　財団法人鳥取県教育文化財団西部埋蔵文化財西伯地区広域農道調査事務所

所長　精山哲雄

主任調査員　北浦弘人　調査員　中森　祥　上田浩一　整理員　山崎裕子

調査指導　鳥取県教育委員会　鳥取県埋蔵文化財センター

下記の方々が発掘調査作業、整理作業に従事した。

田宮繁　山中孝之　地尾悠二　川成寿々子　福井徳子　小林等子　吉持和子　野津松夫　高橋照子　高塚公栄
横田忍　福田弘子　名越直美　松代美佐枝　加藤斐子　新田幾子　新田久永　松下和枝　大渡花枝　田中重子
吉田繁　松波綾子　篠村孝美　秋里登志子　船岡幹子　高塚克人　都田一枝　田中安市　景山寅夫　岡田一枝
東郁枝　加藤久嗣　加藤栄　秋田登美子　三鴨磯定　久村恒義　山中艶子　小川時枝　石黒晨子　渡辺千恵子
勝部忠　林原達枝　樂本静枝　細田フサ子　船越澄江　木下恒代　岩田雅代　平村澄子　吉田一子　元次しみ子
川崎博　中村幸子　有馬貢　高塚八重子　山本清子　福田延子　野島尚子　青木晨子　大東敦子　伊藤恵美子
左藤博　畑さおり　小原円

遺構名新旧対象表

小町石橋ノ上遺跡		SD−10	SD−06	SK−1	SK−20	SK−26	SX−1−4	SD−1	C−1SD−1
(E地区)略称KIB		SD−11	SD−09	SK−2	SK−37	SK−27	SX−1−6	SD−2	C−2SC−1
新	旧	SS−1	SS−01	SK−3	SK−22	SK−28	SX−2	SD−3	C−3SD−1
土墓状遺構	上墓	SS−2	SS−02	SK−4	SK−23	SK−29	SX−3	SD−4	C−5SD−1
SK−1	SK−01	SS−3	SS−01	SK−5	SK−24	SK−30	SK−33	SD−5	C−5SD−2
SK−2	SK−03	SI−1	SI−01	SK−6	SK−26	SK−31	SK−33	SD−6	C−4SD−3
SK−3	SK−04	SI−2	SI−03	SK−7	SK−39	SK−32	SX−10	SD−7	C−4SD−9
SK−4	SK−10	SI−3	SI−02	SK−8	SK−25	SK−33	SX−9	SS−1	C−1
SK−5	SK−06	SB−1	SB−01	SK−9	SK−8	SK−34	SK−16	SS−2	C−2
SK−6	SK−07	朝金第2遺跡		SK−10	SK−7	SK−35	SK−17	SS−3	C−3
SK−7	SK−09	(C地区)略称AG2		SK−11	SK−38	SK−36	SK−32	SS−4	C−4
SK−8	SK−05	新	旧	SK−12	SK−35	SK−37	SX−11	SS−5	C−4
SK−9	SK−11	SK−1	SK−01	SK−13	SK−36	SK−38	SK−18	SS−6	C−4
SK−10	SK−13	SK−2	SK−02	SK−14	SK−28	SK−39	SK−15	SS−7	C−5
SK−11	SK−14	SK−3	SK−03	SK−15	SX−4	SX−1	SX−1	SS−8	C−5
SK−12	SK−17	SK−4	SK−04	SK−16	SX−5	田住第8遺跡		SS−9	C−5
SD−1	SD−01	SK−5	SK−05	SK−17	SX−6	(A地区)略称TS8		SS−10	C−5
SD−2	SD−02	SK−6	SK−05	SK−18	SX−7	新	旧		
SD−3	−	SK−7	SK−09	SK−19	SX−1−1	土墓状遺構	土墓		
SD−4	SD−10	SK−8	SK−08	SK−20	SX−1−5	SK−1	集石1		
SD−5	SD−11	SK−9	SK−10	SK−21	SX−1−7	SK−2	C−2SK−2		
SD−6	SD−04	SK−10	SK−11	SK−22	SX−1−3	SK−3	C−2SK−1		
SD−7	SD−07	田住稲川遺跡		SK−23	SX−1−9	SK−4	C−3SK−1		
SD−8	SD−03	(B地区)略称TSO		SK−24	SX−1−2	SE−1	C−5SK−2		
SD−9	SD−05	新	旧	SK−25	SX−1−8	SE−2	C−5SK−1		

註1　『越歌山遺跡群』　会見町教育委員会・岸本町教育委員会　1992年・1994年

註2　『田住松尾平遺跡発掘調査報告書』　会見町教育委員会　1996年

註3　『小町第1遺跡』　財団法人鳥取県教育文化財団　1996年

註4　『岸本町内遺跡発掘調査報告書』　岸本町教育委員会　1996年

註5　『会見町内所在遺跡試掘調査報告書』　会見町教育委員会　1994年

第2章　位置と環境

第1節　地理的環境

鳥取県

東西120km余にわたり日本海に北面する鳥取県は、明治4年（1871年）年の廃藩置県によって旧山陰道の因幡国と伯耆国の2国および播磨国の一部から成立した。海岸から数十kmほど南行すると、そこはもう1000m級の中国山地の山嶺である。東の兵庫県境にはなだらかな稜線を左右にのばした扇ノ山が因幡国と但馬国をへだて、西には中国地方最高峰伯耆大山がそびえる。総面積3,506.96km²、そのうち86.3%を山地が占め、年間の平均気温は14.3度と雪深いわりに比較的温暖である。因幡国では氷ノ山・那岐山を上流とする千代川、旧伯耆国は東に天神川、西に船通山や大倉山を上流とする日野川など、その地域の起伏に富んだ土地柄や四季のうつろいは人々の生活と深くかかわりあってきた。県人口は約62万人で、鳥取市をはじめ、米子市、倉吉市などの都市部に集中する。

かつて五山の禅僧惟肖巌は山陰の地を「山水勝遊」と賞讃し、なかでも伯耆を「山川秀気」の地と感嘆している。現在鳥取県では将来の発展に向け、恵まれた自然環境を生かした全県公園化構想、環日本海交流圏の形成を目指しての対岸地域との国際交流を推進している。

岸本町

岸本町は総面積40.14km²、人口約7,300人で西伯郡に属する。町域は南北約4.3km、東西約14kmの帯状で西より北東に流れる日野川により二分される。東部は大山の西面中腹標高800mの地点を東端とし、日野川流域に向かって下降する緩傾斜地が広がり、西部は越敷山に続く丘陵地域の様相をなし、会見町と接している。「岸本」の地名は、日野川の川岸に位置することに由来している。町の中心部岸本は国道181号沿いに所在し、米子・日野・大山方面への交通の要衝である。近年、隣接する米子市のベッドタウンとして発展を続け、町の人口は増加の一途をたどり、その増加率は県内で最も高い。また、ペンション村が作られ自然を利用した観光地としての開発が図られている。

会見町

会見町は総面積31.04km²、人口約4,000人で西伯郡に属する。町域は南北約6.5km、東西約7.5kmのやや楕円形を呈し、東は越敷山、高塚山、南は比婆山、西は要害山と一連の山脈に囲まれた盆地状地形を示している。南部の山を源に小松谷川・朝鍋川が北流して法勝寺川となり沖積平野を形成している。北部は米子市と接し、平坦な水田地帯となっている。「会見」の地名は、古代以来の郡名によるものである。町の中心地天万は、古代山陰道の要衝、近世に参勤交代の宿場として栄えた。現在、町では「富有柿」をはじめとする特産品作り、生活環境の整備、「県立フラワーパーク」集客施設の整備などに取り組んでいる。

第2図　岸本町・会見町の位置

第2節　歴史的環境

越敷野丘陵では、近年、大規模公園整備、道路網の整備等で著しく開発が進んでおり、これに伴う遺跡の発掘調査が頻繁に行なわれてきた。その結果、各時代で種々の性格を持つ遺跡の存在が確認されており、この地域の歴史を解明していく上で、貴重な資料を提示している。

この地域の黎明期を遡れば、会見町諸木（第3図17）、岸本町貝田原（同79）における有舌尖頭器が最古の遺物である。これらは縄文時代草創期のものと比定される。隠岐島産の黒曜石を巧みに加工したものであるが、標本数は極めて少なくいずれも遺構に伴わない。具体的な生活相を知ることができるものは縄文時代早期からである。林ヶ原遺跡からは、縄文時代早期の押型文土器が出土した土坑、墓壙に納めた遺体を土器片で覆った中期の墓、落とし穴状遺構9基が確認されている。口朝金遺跡（第34図20）では、大量の縄文時代後・晩期の土器と石斧・石鏃などが出土している。

古墳時代前期に入ると、県下でも有数の文化内容を示す。前方後円墳である普段寺1号墳（第3図28）と円墳である2号墳（同29）からはともに1面ずつ舶載の三角縁神獣鏡が出土し、そのうち1号墳出土鏡は島根県安来市大成古墳・大阪府鐵足塚古墳出土の鏡と同笵鏡である。中期以降には、全長110mを有し山陰最大級の前方後円墳である三崎殿山古墳（同19）、尚方画文帯神獣鏡1面が出土している浅井11号墳（同87）、人物埴輪が出土している後塔山古墳（同18）、家形石棺を直葬した岩舟古墳（同20）、割石小口積の横穴式石室をもつ吉定1号墳（同64）などが造築される。

古代律令制下の会見・岸本町域（以下、当地域）は伯耆国会見郡十二郷のうち、天万郷・星川郷・細見郷・巨勢郷から成る。「古事記」「日本紀」に「伯耆国手間之山本」と記されているのは、天万郷内の手間山に比定されている。この地には「古事記」の大国主命と赤猪の神話にちなむ赤猪岩神社があり、「出雲風土記」に見える「手間駅」も当郷に関連したもので、古代山陰道（第3図太線部はその推定路）の要衝であった。この頃の遺跡に金田瓦窯跡（第3図13）がある。小山の南斜面の地中を刳り貫いて造られた登り窯で、ほぼ完全な姿をとどめている。この窯は、巨勢郷内にあったと比定される白鳳期創建の寺、大寺廃寺（同62）の瓦生産窯であったと推定されている。この大寺廃寺からは、山陰唯一の三段舎利孔をもつ心礎、全国でも例の少ない高さ約1mの石製鴟尾、蓮華文をもつ古瓦が出土している。発掘調査で、東を正面とし、回廊で囲まれた金堂・塔を南北に併置した伽藍配置であることが確認されている。また同郷内には、奈良時代末期から平安時代初期といわれる「坂中廃寺」（図61）の心礎が残っている。

中世における当地域には、かつての天万郷の地に富田荘、星川郷の地に星河荘、巨勢郷の地に八幡（相見）荘、細見・日下両郷に中間荘および久吉牧（荘）が存在する。この内その所属が明らかであるのは、星河荘と久吉牧である。星河荘は寿永3年（1184年）以前には成立しており、「源頼朝下文案」によれば、賀茂別雷神社に属する荘園であることが知られる。久吉牧は、観応2年（1351年）には伯耆守護山名時氏がこれを大山寺西明院に寄進したことにより、その後戦国末期に至るまで大山寺西明院領荘園として維持された。当地域は、出雲と伯耆、備中を結ぶ交通の要衝に位置する。このため、南北朝以後小松城（第3図14）・門山城・寺内城・天万城（手間要害、第3図34）などの山城が築かれ、たびたびその争奪をめぐる激しい戦闘が展開された。特に戦国期には、隣国出雲から伯耆・因幡に勢力を伸ばした尼子氏、備後・安芸方面から北上する毛利氏がともにこの地域に軍勢を進めた。小松城跡は、小規模ながら小松谷川を外堀に見立て、堀割や土塁等の遺構を残している。なお、当地域内の中世寺院としては、大寺の安国寺、御内谷の寰光寺（第3図16）、手間山の麓にある盛岳山大安寺（同27）がある。南北朝初期、足利尊氏と直義は南北朝内乱における戦死者の霊をとむらうため、各国ごとに一寺一塔を建てて追善供養を行なったが、伯耆国では大寺の地に安国寺が造られた。永禄年間（1558～70年）尼子の敗将が安国寺にたてこもったため、毛利方の尼高城主杉原盛豆がここに焼打ちをかけ焼失した。雲光寺は、明徳年間（1390～94年）に創建され、のち尼子経久の保護を受けたといわれる。杉原播磨守盛重ゆかりと伝える大安寺は、彼の没後、天正11年（1583年）主君供養のため旧臣らによって田畑山林を寺に寄進安堵して開基と仰がれ、寰山に

は墓標としての宝篋印塔がある。

近世、当地域を含む伯耆国は、中村一忠、加藤貞泰と領主が交代し、元和3年（1617年）池田光政が因幡・伯耆の両国32万石を領する鳥取城主に転封され、それまで分割支配されていた因伯が一つとなり鳥取藩ができる。当地域は、藩の直轄領、寺社領を除いた大半が米子城主荒尾家の領内に所属した。鳥取藩政期の代表的な土木工事の一つに、石田村吉持家による長者原・佐野川開発事業がある。吉持家による新田開発事業は元和4年（1618年）に始まり、文久元年（1861年）佐野川用水全通まで実に11代250年の大事業であった。この吉持家の住宅は、県指定の保護文化財として田住地内にある。主屋は棟札などから文化年間（1804～18年）に普請したものとされている。

江戸時代後期の当地域の様子を、『會見郡住吉村地籍絵圖面帳』（第117図）、『星川拾二景』により垣間見ることができる。『會見郡住吉村地籍絵圖面帳』は、文政6年（1823年）に作成された。藩内各郡の大庄屋は、自分の管轄地である講内における各村の田畑地統全図或は絵図面を描かせ所持し、常に田畑・水利のことに配慮したものである。田住の加藤貞澄によって、文政8年（1825年）に著された『星川拾二景』は、近江八景に倣い、星川庄内の村々の情景を書き記したものである。その中には住吉村の一項と題し、「紫雲庵ノ涼ミ」、「四軒屋ノ月」という今日でも鑑賞するに足る情景が描き出されている。

参考文献

『会見町誌』　会見町誌編さん企画委員会編　会見町　1973年

『会見町誌続編』　会見町誌続編さん企画委員会編　会見町　1995年

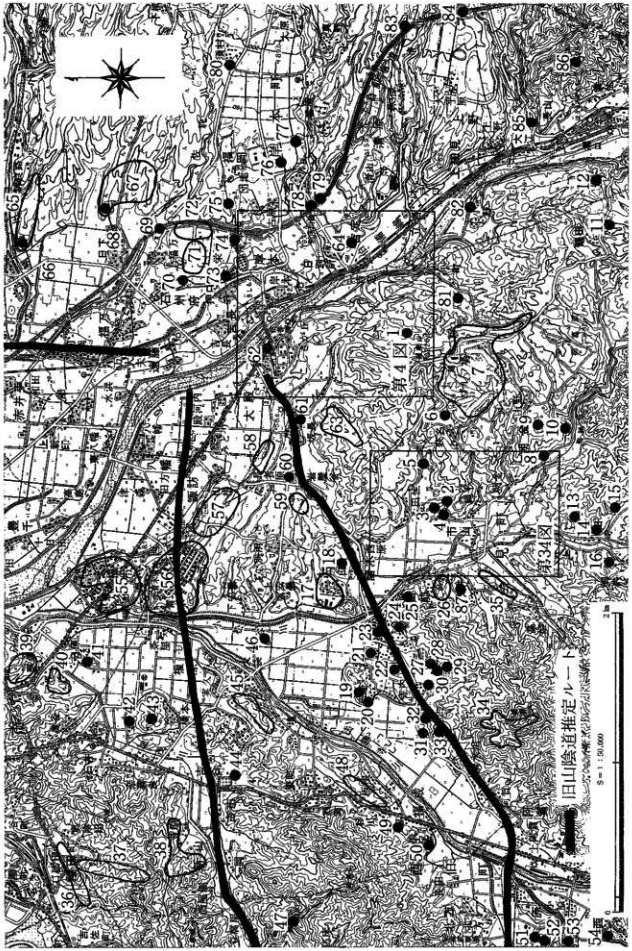
『岸本町誌』岸本町誌編さん委員会編　岸本町　1983年

『日本の古代遺跡　9　鳥取県』　野田久男　清水真一編　保育社　1983年

『萱原・奥陰田Ⅰ』　米子市教育文化事業団　1994年

1	小町石橋ノ上遺跡	2	朝金第2遺跡	3	田住稲用遺跡	4	田住第8遺跡	5	吉持家住宅
6	荻名遺跡	7	越敷山遺跡群	8	朝金小チヤ遺跡	9	上野遺跡	10	朝金天田遺跡
11	鶴田荒神ノ峯遺跡	12	鶴出合清水遺跡	13	金田瓦窯跡	14	小松城跡	15	両部太郎窯跡
16	雲光寺	17	諸木遺跡	18	後塔山古墳	19	三崎殿山古墳	20	岩舟古墳
21	宮尾遺跡	22	天萬上井前遺跡	23	日の岡古墳	24	大万遺跡	25	宮前古墳群
26	宮前遺跡	27	大安寺	28	普段寺1号墳	29	普段寺2号墳	30	寺内8号墳
31	枇杷塔遺跡	32	才の木遺跡	33	膳棚山要害	34	手間要害	35	高姫古墳群
36	陰田遺跡群	37	奥陰田遺跡群	38	新山遺跡群	39	東宗像古墳群	40	宗像古墳群
41	日原6号墳	42	奈宮良遺跡	43	橋本要害	44	吉谷トコ遺跡	45	境古墳群
46	大袋丸山遺跡	47	長台寺城跡	48	福成古墳群	49	清水谷遺跡	50	小鷺城跡
51	マケン垣古墳群	52	北福王寺遺跡	53	小提山横穴墓群	54	西横穴墓群	55	福市遺跡
56	青木遺跡	57	諏訪遺跡群	58	長者原古墳群	59	別所古墳群	60	長者屋敷遺跡
61	坂中廃寺	62	大寺廃寺	63	坂長古墳群	64	吉定1号墳	65	尾高浅山遺跡
66	尾高浅山1号墓	67	日下古墳群	68	口下1号墓	69	上福万遺跡	70	河岡城跡
71	石州府古墳群	72	石州府第1遺跡	73	岸本遺跡	74	岸本下ノ原遺跡	75	福岡古墳群
76	久古北田山遺跡	77	番原第1遺跡	78	久古第3遺跡	79	貝田原遺跡	80	須村遺跡
81	小町第1遺跡	82	小野所在遺跡	83	林ケ原遺跡	84	下山南通遺跡	85	長山馬籠遺跡
86	鬼住城跡	87	浅井11号墳						

第3図　分布図遺跡名対照表



第3図　周辺遺跡分布図

第３章　　小町石橋ノ上遺跡の調査

第１節　位置と環境　（第４～６図）

東に”伯耆富士”大山を遠望する調査地は、西伯郡岸本町小町字石橋ノ上に所在する。日野川から西へ約1km、越敷山山頂へ伸びる尾根部とその東南側の斜面部が調査対象となった。現況は松と竹による雑木林であるが、調査地内の尾根裾部で４面用畑の造成地があり、それに続く北東側では水田が営まれている。さらに北には農業用溜池である石橋下池がある。調査地内の標高は尾根上で155.0～162.0m、裾部では124.0～135.0mである。

石橋下池を挟んで東には、落とし穴状土坑を検出した小町越城野原第１、２遺跡（第4図13、14、以下同じ）がある。ゴルフ場建設に伴い大規模な調査が行われた越敷山遺跡群（1）でも、弥生時代末～古墳時代初頭を中心とする集落跡とともに341基もの落とし穴状土坑が見つかった（註1）。越敷山系はこの土坑が密に分布している。

越敷山山頂から北方向に伸びる尾根上には80基ほどの古墳が知られ、そのほとんどが円墳である。山頂に築かれた越敷山013号墳（2）はこれらの中で最も規模の大きいもので、前方後円墳である。また調査地から東へ50mほどの所には越敷山019号墳（4）があり、これも前方後円墳とされている。この古墳群で調査されているものは伯楽塚16号墳（10）のみで、出土した須恵器などの遺物から6世紀末～7世紀初頭に位置づけられている。

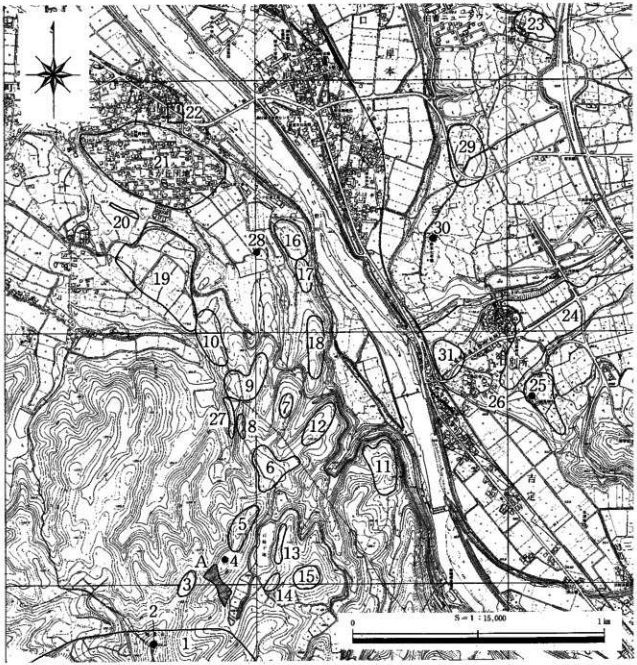
越敷山北麓、日野川左岸の低地には白鳳時代に大寺廃寺（22）、奈良時代後期に坂中廃寺が造営された。大寺廃寺は国の重要文化財に指定されている石製鴟尾があり、鳥取県教育委員会、岸本町教育委員会により７次にわたって発掘調査がなされた。その第１、２次調査において、正面を東にとる全国的にも稀な寺院であることがわかった（註2）。金堂が南、塔を北、講堂を西に配置する変形の法起寺式伽藍配置であり、八葉複弁蓮華文軒丸瓦や重弧文軒平瓦などが出土しており、6kmほど北に位置する会見町の金田瓦窯跡でこれらの瓦を製作していたと推定されている。また大寺廃寺を中心に、日野川右岸や越敷山系などの周辺では瓦などが点在して見つかっている。

ここより西方の長者原台地は西に青木遺跡、福市遺跡が、東には長者原古墳群や平安時代の豪族、紀成盛の屋敷跡と伝えられる長者屋敷遺跡がある。長者屋敷遺跡の調査では梁行3間、桁行6間のものとその東に梁行3間、桁行9間の大規模な掘立柱建物跡などがみつかった（註3）。大寺からここを通り、会見町の天万へ抜けるルートは吉代山隘道であるとされ、この遺跡が会見郡の郡家であったと推定されている。ここより1kmほど東に坂中廃寺がある。発掘調査は行なわれていないが、基壇状の高まりや塔心礎があり、また単弁八葉蓮華文の軒丸瓦など伯耆国分寺のものと似たものが発見されている（註4）。これらの遺跡からこの辺りが会見郡の中心地として栄えていたことを偲ばせる。

第２節　調査の経過と方法

調査は平成８年４月より開始され、９月に現場作業を終えた。調査地内は事前に、岸本町教育委員会によって試掘調査が行なわれ（註5）、遺構、遺物の検出状況、及び現地形から判断し調査範囲が決められた。その面積は4,681m^2であった。さらに尾根上には、事前の分布調査及び試掘調査によって土壇状遺構が築かれていること、またその下層には遺構があることが判明していたため２層にわたって調査することとなった。

発掘調査はまず尾根部から行ない、表土を重機によって剥ぎ調査した。土壇状遺構には試掘時に横断２本（T－30、31）、縦断１本（T－32）のトレンチを入れているが、その時期や性格については不明であった。そこでそれらトレンチの精査をするとともに新たに横断２本のトレンチ（第8、9図－A、B）を設け、さらに縦断に断ち割って層位的な検討を行なった。この調査が終了した６月初頭、再び重機によって下層の遺構面まで掘り下げた。このとき同時に斜面から裾にかけても重機によって表土を剥いだが、斜面部はこの段階で遺構が見られず、調査を尾根上と裾部の２カ所に集中することにした。尾根上では黒色土を埋土とする土坑や溝状遺構を検出した。

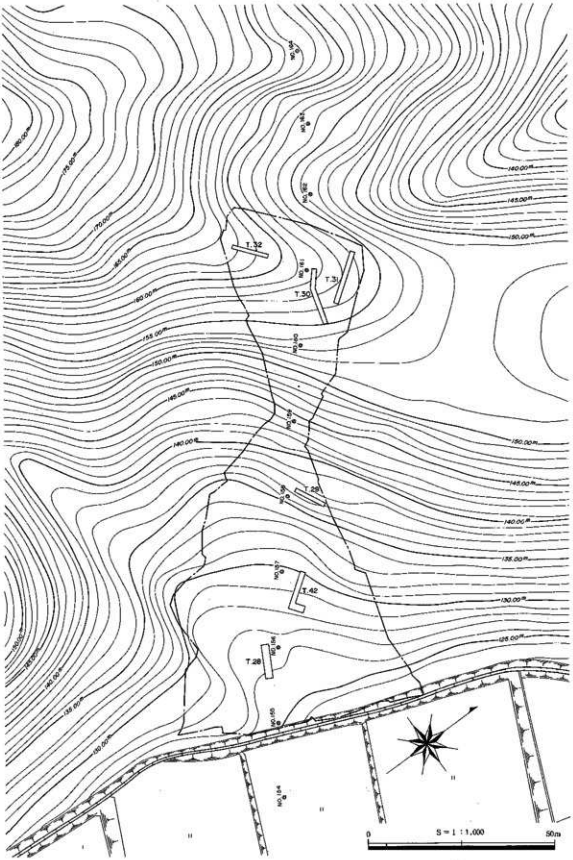


第４図　周辺遺跡分布図

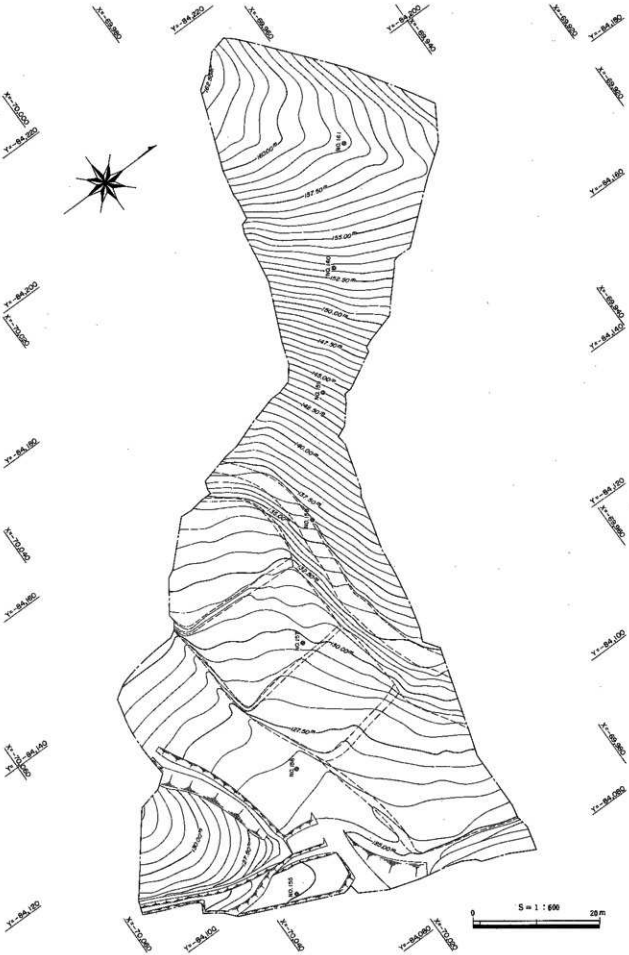
A 小町石橋ノ上遺跡（0350） 1 越敷山遺跡群（0186～0188） 2 越敷山013号墳(0078) 3 越敷山116、17、118号墳(0081、0082、0183) 4 越敷山019号墳(0084) 5 越敷山020～098号墳(0085～0098) 6 越敷山042～048、083～097号墳(0107～0113、0148～0162) 7 越敷山068～070、111号墳(0133～0135、0176) 8 越敷山061～065号墳(0126～0130) 9 越敷山057～060、100～110、112～114号墳(0122～0125、0165～0175、0177～0179) 10 伯楽塚001～015号墳(0063～0077)、016号墳 11 越敷山049～055、072～077、098、099号墳(0114～0120、0137～0142、0163、0164) 12 越敷山071、079～082号墳（0136、0144～0147） 13 小町越野原遺002遺跡(0348) 14 小町越野原遺001遺跡(0349) 15 越敷山034～040号墳(0099～0105) 16 越敷野原遺跡(0052) 17 越敷野原001～005、010、011号墳(0029～0033、0038、0039) 18 越敷野原006～009、012～023号墳(0034～0037、0040～0051) 19 坂中第005遺跡(0018) 20 坂長宮田ノ上遺跡(0346) 21 越敷が丘遺跡(0028) 22 大寺廃寺(0024) 23 岸本下ノ原遺跡(0279) 24 久吉第003遺跡(0291) 25 吉定002号墳、口別所001～006、009号墳(0316、0316～0322、0325) 26 吉定001号墳(0315) 27 坂長佛谷遺跡(0347) 28 大寺原遺跡(0062) 29 岸本001～006号墳(0261～0266) 30 岸本007号墳(0267) 31 吉定遺跡(0314)

第４図　周辺遺跡分布図遺跡名対照表

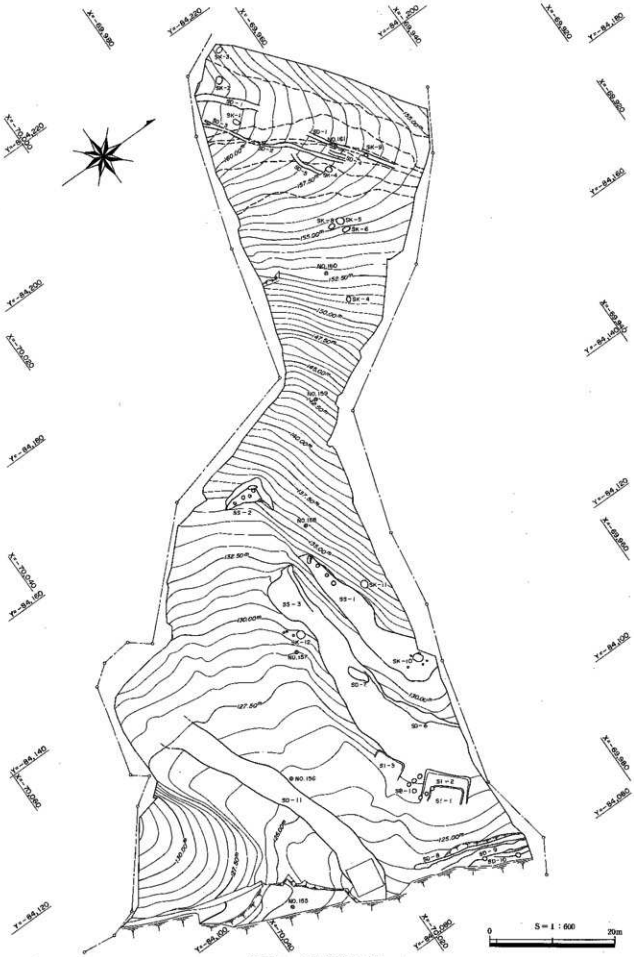
（　）は、鳥取県埋蔵文化財センター編集の岸本町内遺跡分布図の遺跡番号



第５図　調査地周辺調査前地形実測図



第６図　調査地調査前地形実測図



第７図　全体遺構実測図

調査前の原地形では裾部と斜面部との変化点に越敷山山頂へ登る道が、調査区をほぼ東西に横切るようについていた。そしてこの付近で8世紀後半の須恵器の坏（第15図8、写真図版38－8）を表採したことから、該期の遺構があることが予想された。そして黒色土の下層より柱穴と溝を検出、そこがテラス状遺構（ＳＳ－1、2）であることを確認した。またその道の南側には田畑の造成による段状地形が４段みられた。そこで東西に上層観察用の畦を残して、重機によって地山面までを掘り下げた。東へ行くほど黒色土の堆積は厚く、掘り下げた層は遺物をほとんど包含していない。特に西側においては造成時にかなり削平を受けていることがわかった。一方削平を受けていない東側で黒色土の堆積する土坑の検出に努め、竪穴住居跡（ＳＩ－1～3）を３棟、掘立柱建物跡（ＳＢ－1）１棟を検出した。

調査区の北隅には小高い丘陵地がある。ここも重機によって表土を除去した後、縦横にトレンチを設定し精査したが遺構はなく、瓦や須恵器、土師器、縄文土器などの破片が僅かに出土したのみであった。この丘陵部と造成地面との間は谷状地形となっており湧水していた。この旧河川（ＳＤ－11）に直交するトレンチを数本設定し人力で掘り下げたところ、瓦や円筒埴輪などの遺物がまとまって出土した。しかし湧水が甚だしく作業が困難であったため、遺物の検出状況を把握することはできなかった。

本調査では遺跡の性格を探るべく、幾つかの自然科学的分析を行なった。当時の植生については植物珪酸体分析を、土墨状遺構の構築方法を知るためのリン・炭素分析、落とし穴状土坑の下層からその性格を検討するため花粉分析など、また竪穴住居跡ではその建築材の樹種鑑定と放射性炭素年代測定を試みた。さらに周辺遺跡と関連づけることを目的に出土した瓦や須恵器の胎土分析を行なった。

検出された遺構は、それぞれ実測、写真撮影を行ない、調査区全体については調査後の地形を測量し、ラジコン・ヘリコプターによる空中写真撮影を行なった。最終的な調査延べ面積は5,506㎡であった。

第３節　遺構と遺物

１　概要（第7図）

遺構は尾根上に土墨状遺構1、落とし穴状土坑9基（ＳＫ－1～9）、溝状遺構5条（ＳＤ－1～5）、尾根裾部には竪穴住居跡3棟（ＳＩ－1～3）、掘立柱建物跡1棟（ＳＢ－1）、テラス状遺構3基（ＳＳ－1～3）、溝状遺構6条（ＳＤ－6～11）、落とし穴状土坑2基（ＳＫ－11,12）、土坑1基（ＳＫ－10）を検出した。

尾根上の遺構はいずれも時期が不明である。土墨状遺構は試掘時（Ｔ－31）にその下層から円筒埴輪が出土しており、古墳時代以後につくられたものであることが推測できる。裾部の竪穴住居跡は古墳時代、掘立柱建物跡、テラス状遺構は奈良時代のものである。またＳＤ－11で古墳時代から近世にかけての遺物が出土している。

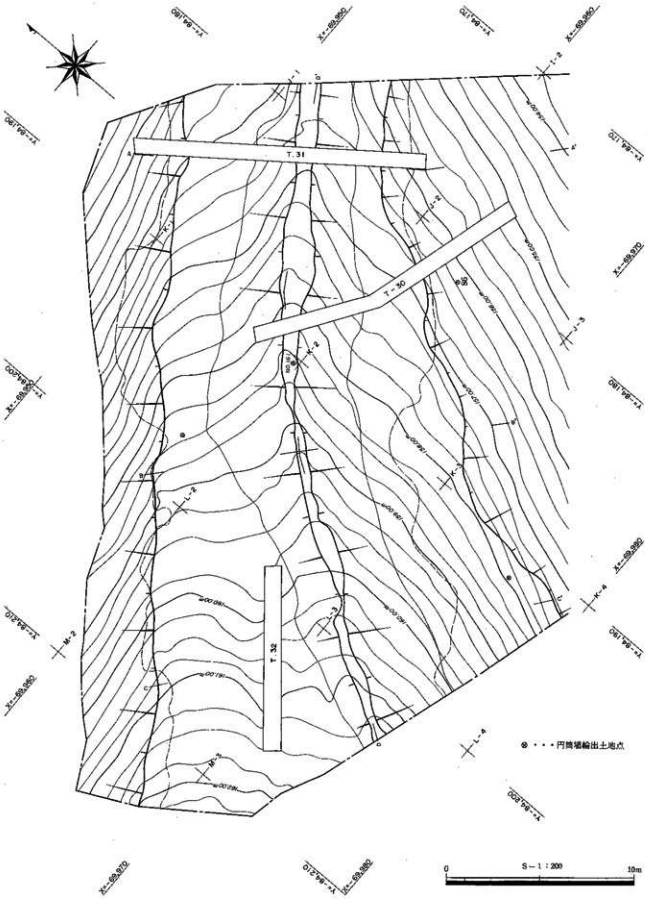
２　尾根上の調査

・土墨状遺構（第8、9図、写真図版2）

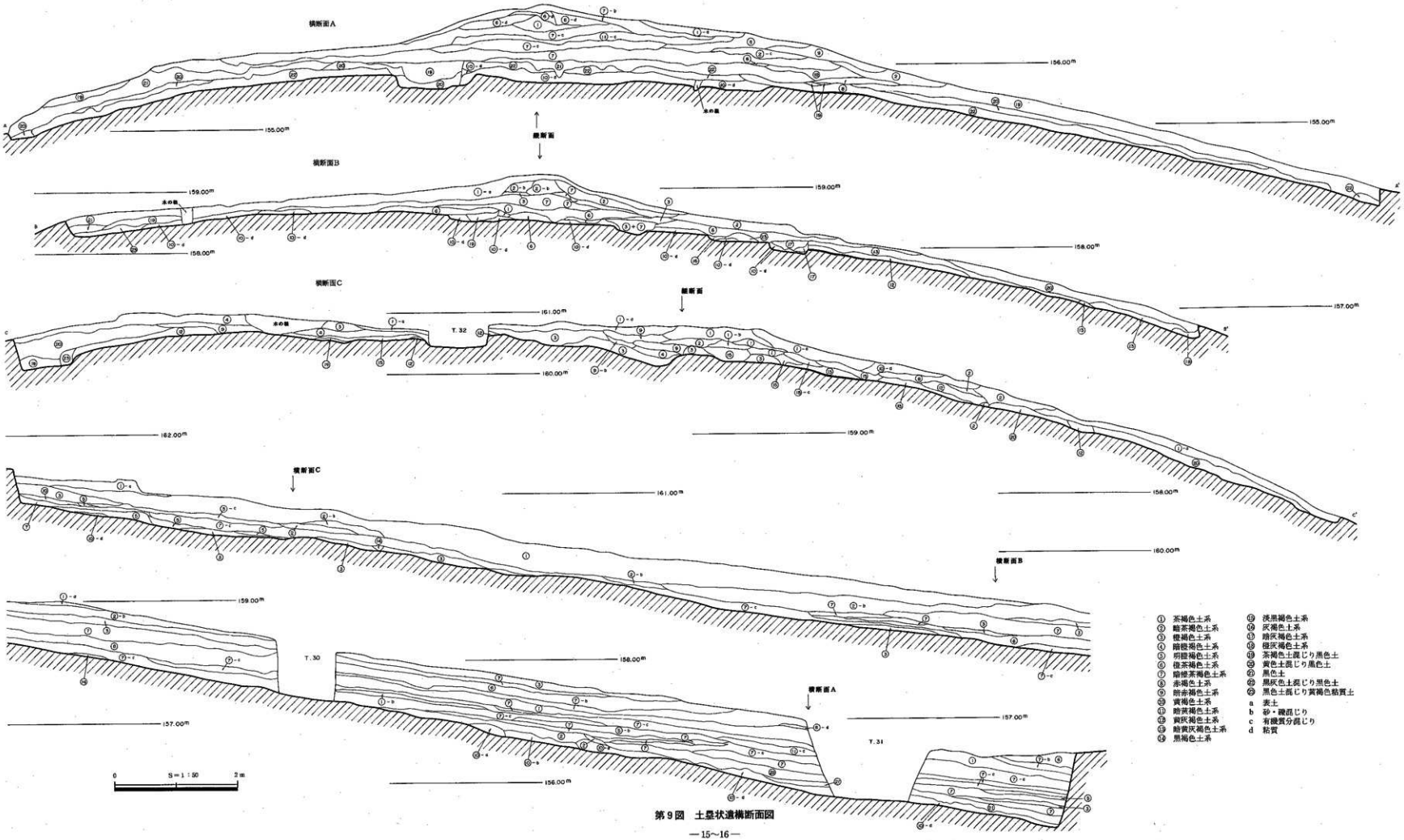
南西から北東にはしる尾根上に土墨状遺構は築かれている。この尾根の北西側は尾根が切れるとすぐ急な斜面となり板長の集落へ続く谷となるが、南東は長く緩やかな斜面の後、裾へ向かって急斜面となる。

土墨状遺構は調査区北東壁から南西へ約15m尾根と並行にはしり、そこから約18度南の方向へ屈曲し20mほどで南西壁にあたる。調査区外へは南西へ約50m、北東へは約30m続いている。調査区内においてその頂部の標高が約156.5mから161.4m、南西が高く、その比高差は4.9mほどである。尾根の高さが南西へ行くほど上がって土墨状遺構の盛土は低くなっているのに対し、北東では非常に高く、その高まりが明瞭にわかる。高さは南西で0.5mほどだが、北東では約1.2mを測る。土墨状遺構の平面的な広がりは北東では11mほど、南西ではほぼ倍の22.5mある。

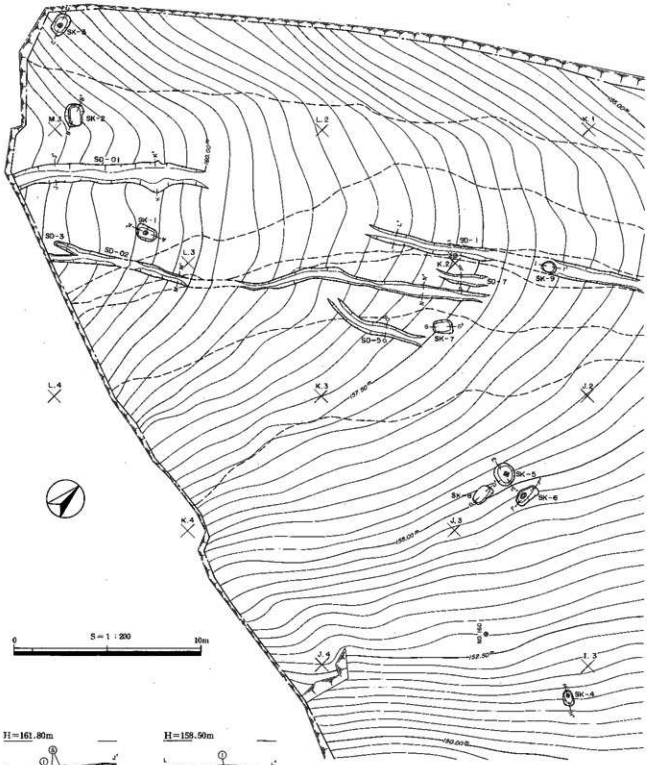
この両裾には黒色土が堆積している。下層で検出した土坑の埋土も黒色土であることから、土墨状遺構構築以前には尾根上をこの土が覆っていたと考えられる。そして構築時にほとんどこの上を除去し、さらに尾根（地山）

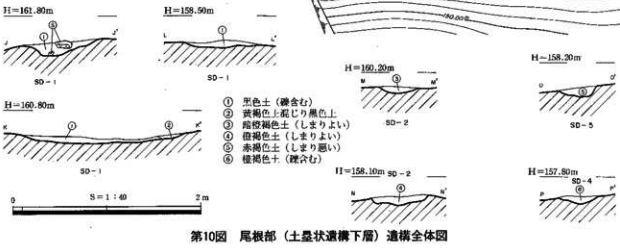


第8図　土墓状遺構平面図

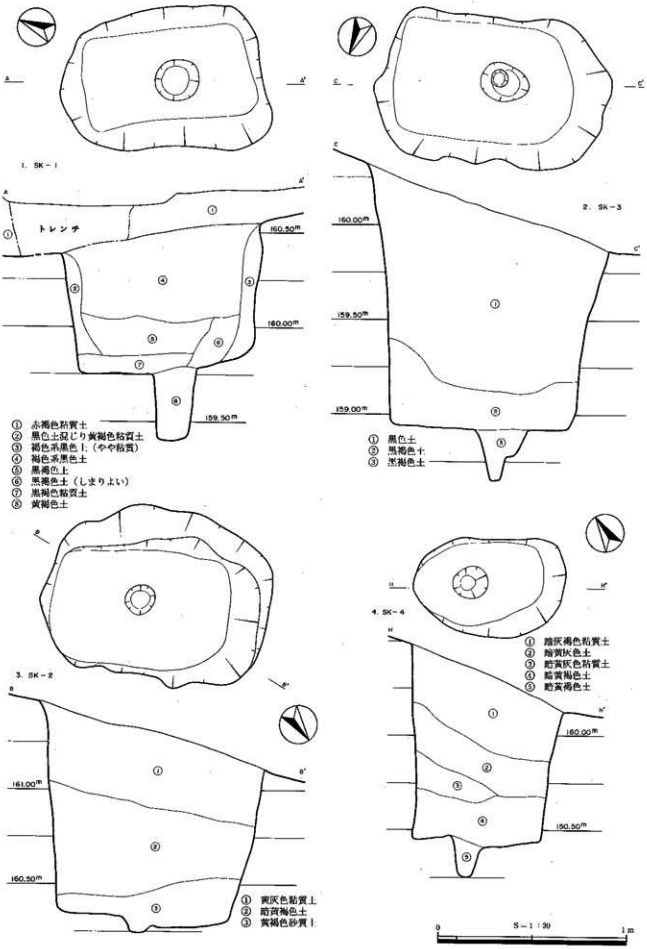


第9図　土塁状遺構断面図

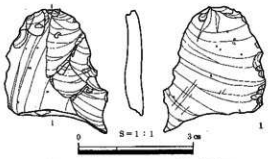




第10図　尾根部（土塁状遺構下層）遺構全体図



第11図　SK－1～4実測図

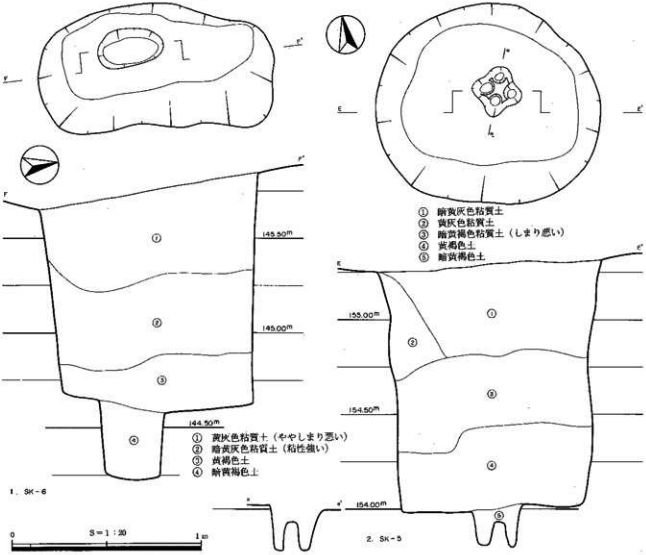


第12図　ＳＫ－１出土遺物実測図

を平らに均していることが横断面（第9図、写真図版2）からわかる。その上には橙褐色系の土を積みベースとし、有機質分を含んだ上や橙褐色土、茶褐色土を10～20cmほどの厚さで互層に積み版築していく。

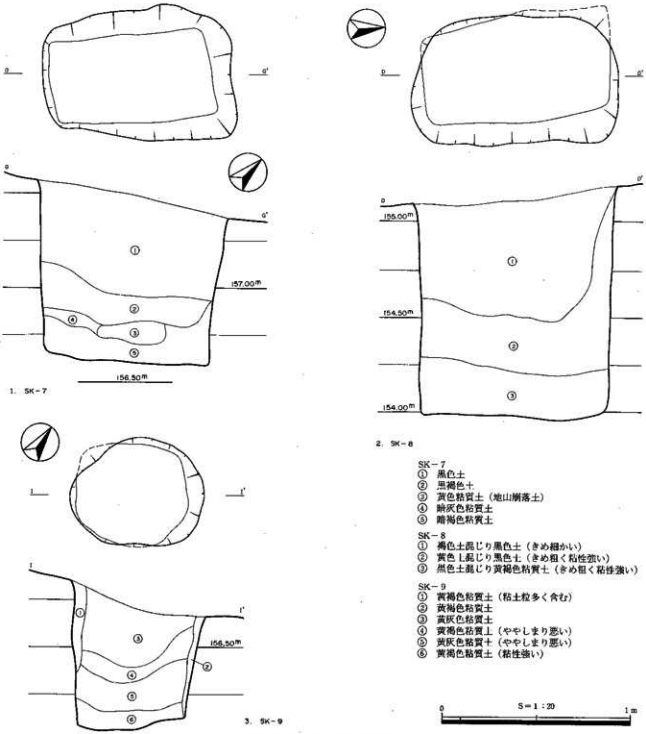
横断面の形態をみると屈曲部の東と西でやや異なっている。前者（第9図横断面A、B）では上墨状遺構頂部は台形状を呈し北側はゆるやかな斜面が頂部へ続くが、南は北に比べやや傾斜があり、斜面が頂部手前で屈曲し立ち上がる。これは頂部に②－ｂ層や⑥－ｄ層を土墨状遺構の芯となるように積み、突き固められ盛り上がっているためである。頂部平坦面の幅は0.7～1.6mであった。一方後者（第9図横断面C）は頂部から南はゆるやかな斜面、北側は平坦面がつくられる。頂部は①層を厚く幅広く積んでおり、明瞭な高まりを形成しない。頂部平坦面の幅は0.5～0.9mと東に比べ狭い。縦断面（第9図）をみると、屈曲部の東側は粘質土や有機分を含む土を互層に丁寧に積んでいる。それに対し西側では下層は東側と同様互層に積んでいるものの、上層は茶褐色土が厚く積まれやや雑なつくりとなっており、その違いがわかる。

なお調査区北東壁の断面において土墨状遺構の構築工法を探るべく、柱状に土壌を採取しリン酸・炭素分析を行なった。そしてリン酸や有機炭素の含有量からこの土墨状遺構は１度に盛土されたこと、構築土は１カ所ではなく何カ所かから採取され用いられているということがわかった。



第13図　ＳＫ－５、６実測図

遺物は土墓表土中から円筒埴輪片が3点（第30図86、写真図版40－390、391）、馬の蹄鉄が1点出土した。86は須恵質の円筒埴輪片である。復元胴部径は23cm、タガは1.2cmと突出する。タガ上方はしっかり面取りしているが、下方はナデるのみで断面は台形である。外面はタテハケ、タガはヨコナデ調整する。内面はヨコナデ後部分的にヨコハケか。ハケは1cm前後の幅をもつ。時計回りの巻き上げ技法によりつくられ、粘土紐は内傾している。川西編年のⅣ期（5世紀後半）に相当（註6）。390は須恵質の円筒埴輪片で器壁が薄い。色調は肌色を呈し焼成良好なものである。外面はやや粗いタテハケで、ヨコナデ調整もみられることからタガの近辺の破片と思われる。内面は細かいヨコハケを施す。Ⅴ期（5世紀末～6世紀初）に相当か。391は焼成が悪く、内外面とも摩滅している。タガの下方からやや強めのナデ調整がなされ、断面三角形を呈す。Ⅳ期に相当するものと思われる。



第14図　ＳＫ－７～９実測図

・溝状遺構（ＳＤ－1～5、第10図、写真図版2）

尾根に並行に走る溝状遺構は5条検出された。そのうちＳＤ－1は調査区南西壁から若干弓なりになり、そこから9mほど切れるがほぼ真っすぐに北東へ延びる。その検出した全長は34mほどで南西方向は調査区外へ続いている。幅は55～160cm、深くても15cmほどしかなく、埋土は黒色土であった。

これと並行するＳＤ－2は調査区南西壁から北東へとやや蛇行しながら延び、23.5mにわたって検出した。これも同じく南西方向へ続いているものと思われる。幅は35～58cmとＳＤ－1に比べ狭く、深さも5～10cmと浅い。褐色土を埋土とする。このＳＤ－2に南西壁近くで接続するのがＳＤ－3である。しかし検出した長さはわずかに1.2mであった。またＳＫ－7の内にあるＳＤ－5は6mほどＳＤ－2と並行した後、西へ曲がってＳＤ－2の方へと向かう。幅は70cm前後、深さも10cmほどのものである。

ＳＤ－4は調査区ほぼ中央にあり、ＳＤ－1、2に挟まれている。全長が2.8m、幅が40cm、7cmほどしか深さはない。礫を含んだ橙褐色土が埋土である。これら溝状遺構の埋土は土墨状遺構の盛土であることから、土墨状遺構構築の際に掘り込まれたものであると推測される。なお遺物は出土しなかった。

・落とし穴状土坑（ＳＫ－1～9、第11～14図、写真図版3、4）

土墨状遺構下層からは9基の土坑が検出された。底面にピット（以下底部ピットとする）をもつものが6基（ＳＫ－1～6、第11、13図）、もたないものが3基（ＳＫ－7～9、第14図）あった。これらは一般に"落とし穴"とされるものであるが、積極的にそれと根拠づけるものがないためここでは落とし穴状土坑としておく。尾根上には3基あるいずれも長軸を尾根と並行に採っている。この尾根は土墨状遺構築造時にほぼ幅10mにわたって削平されていると思われ、これらの土坑は検出した深さよりもさらに深いものであったと考えられる。

ＳＫ－1は調査区西側、Ｌ－3杭より2mほど西に位置し、尾根に並行にはしるＳＤ－1、2に挟まれたところにある。検出面で長軸が107cm、短軸75cmの長方形を呈し底面中央に底部ピットをもつ。底面までの深さが80cm、ピットは38cmである。埋土は黒色土を基本とし、ピット内には黄褐色土が堆積していた。この土の花粉分析を試みたが花粉化石は検出されなかった。また底面に堆積していた第7層を植物珪酸体分析、リン・カルシウム分析したが、前者ではタケ亜科が多産しているということがわかったのみ、後者ではリン酸、カルシウムとも天然賦存量を越えるものではなかった。この土坑の第4層からは黒曜石の剥片1点が出土した（第12図1、写真図版40）。腹面右側面には微細剥離痕が連続している。時期は不明である。

いずれも底部にピットをもたないＳＫ－7、9は調査区のほぼ中央にある。ＳＫ－7はＳＤ－5の東端に位置し、深さは95cm、平面長軸は98cm、短軸73cmの長方形である。上層に黒色土、下層には暗褐色粘質土が堆積していた。

ＳＫ－9はＳＤ－1内にある。先述のようにこの溝状遺構は土墨状遺構築造に際してつくられており、土坑は溝埋土を取り除いた後検出したことから、溝以前に掘り込まれたものであると考えられる。埋土は黄褐色粘質土を基本とし、深さ80cm、平面は長軸70cm、短軸55cmと小型で楕円形を呈する。

尾根北側斜面には2基ある。いずれも調査区西隅に位置し、尾根に対し垂直方向に長軸を採る。ＳＫ－2は尾根の傾斜変換点につくられ、深さ120cm、長軸は121cm、短軸90cmの平面長方形である。底面には5cmと非常に浅い底部ピットをもつ。埋土は上層に黄灰色粘質土、最下層には黄褐色砂質土と他の土坑とは堆積状況が異なっている。そのＳＫ－2の西約4mのところにあるＳＫ－3は長軸128cm、短軸78cmの長方形で深さは137cmを測る。さらに底部ピットは25cmで長軸26cmの楕円形を呈し、断面形態をみるとピットの中間辺りで段を形成する。

尾根から斜面を約3m南に下がったところに3基固まって落とし穴状土坑が存在する。丁度等高線に並行な長軸をもつのがＳＫ－6と8、垂直なものがＳＫ－5である。ＳＫ－5は長軸120cm、短軸106cmの楕円形を呈す。深さは130cmであり、底面では四葉のクローバー状の4基のピットを検出した。それらの深さは18～25cmを測る。埋土は黄褐色土を基本としており、ピット内の暗黄褐色土を花粉、リン・カルシウム分析した。しかし花粉化石はほとんど検出されず、またリン酸、カルシウムとも天然賦存量を越えるものではなかった。

ＳＫ－6は長軸124cm、短軸65cmの長方形で、底面までの深さは138cm。底部ピットは34×20cmの楕円形を呈

し、深さ33cmと大きなものである。ＳＫ－5と同様な埋土、堆積状況であり、その同時期性が伺える。一方黒色土を基本的な埋土とするＳＫ－8は、長軸110cm、短軸67cmの長方形で西側（尾根側）の底面がやや上端よりも外側に張り出す。底面にピットはない。

これら3基の土坑群から11mほど東へ斜面を下がった、Ｉ－3坑から南へ150cmほどのところにＳＫ－4は位置する。長軸は80cm。斜面とは垂直につくられており、平面形はほぼ楕円形を呈する。深さが110cm、底部ピットは円形で20cmの深さがある。埋土は上層に暗灰褐色土、中間層には暗黄灰色土、下層は暗黄褐色土が堆積している。　ＳＫ－1以外からは遺物は出土せず、いずれの土坑もその時期は不明である。

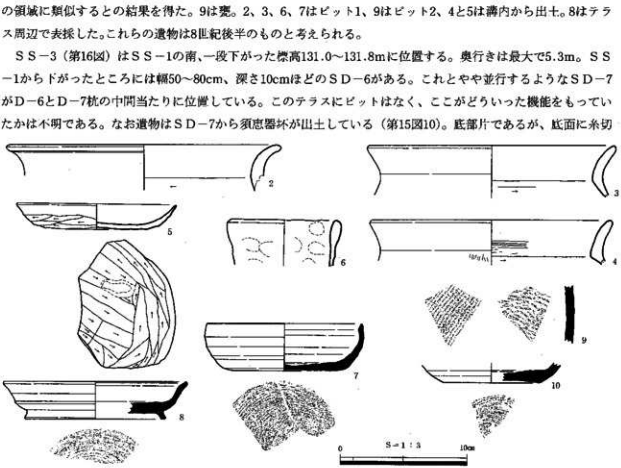
3　尾根裾部の調査

・テラス状遺構（ＳＳ－1～3、第15～17図、写真図版5）

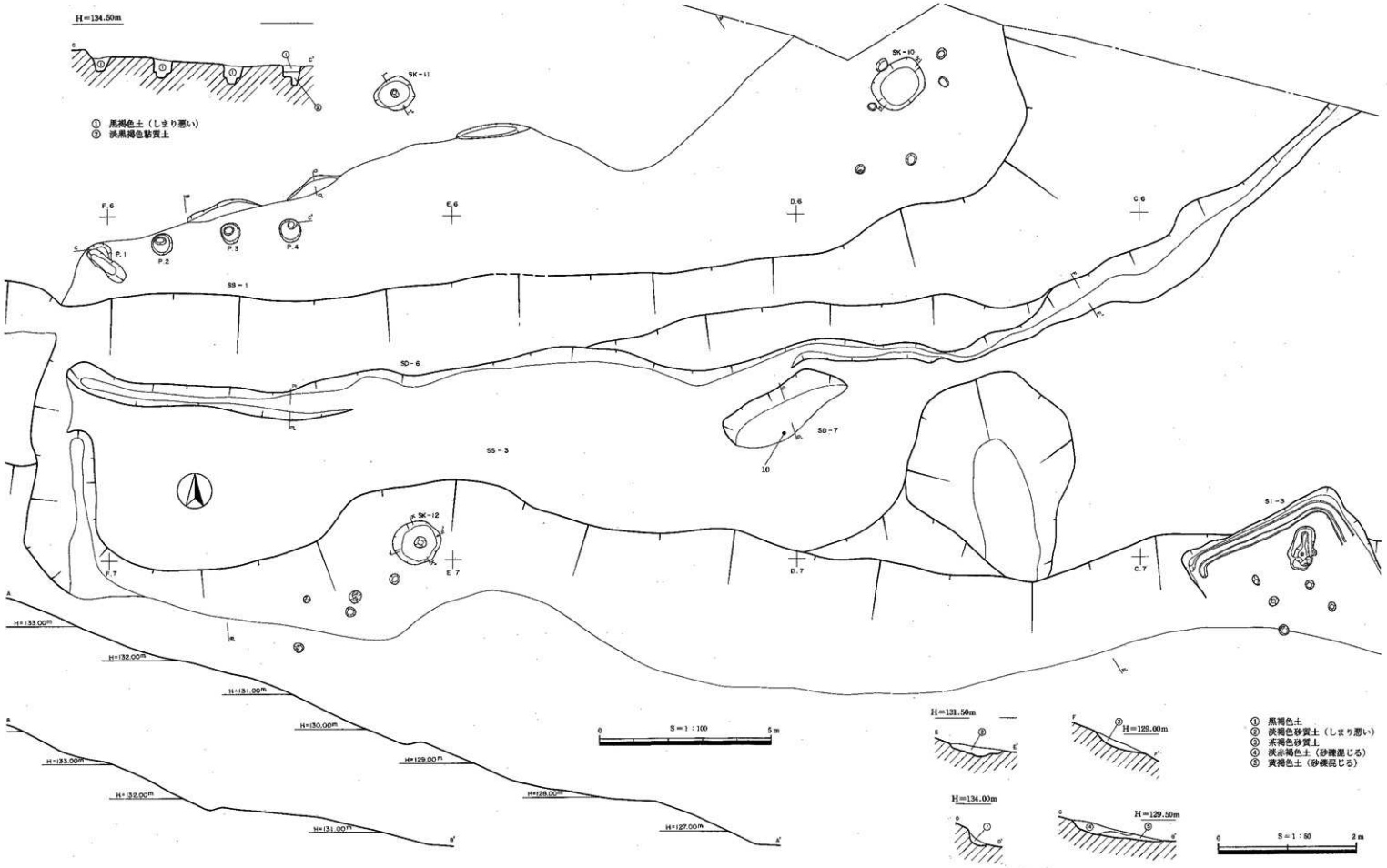
ＳＳ－1（第16図）は標高約133.3～133.8mに位置する。ここは越敷山山頂へ上がる山道として地元の人々に利用されていて、東側は後世の削平を受け範囲は不明であるが、推定16mの長さがあったと思われる。奥行きは約4m。検出面で幅約50cm、深さ5～10cmの溝があり、テラス西端で東西に並ぶ4基のピットを検出した。直径約70cm、深さは35～60cm。ピット間の距離は約1mで、これらを柱穴とする建物が建っていたと推測される。

遺物は土師器（第15図2～6）、須恵器（7～9）が出土した。2～4は甕で、いずれも口縁の破片である。内面の頸部から下を横方向に削り明瞭な稜線ができる。口縁部は内外面ともヨコナデ。4は内外面に炭化物が付着する。5は皿である。復元径は12.8cm、器高は2.1cm。内面及び外面口縁部はナデ、外面底部はケズリ。器壁は4mmと薄い。本品は胎土分析により、鳥根県東部地域のもの（Ａ群）の領域に類似することが指摘されている。6は製塩土器である。口縁部は肥厚し、内外面に指押さえがみられる。胴部は5mmと薄い。7は坏で口縁内面を肥厚させ、底部に糸切り痕がある。8は高台付きの坏で金属器を模造したものである。焼成が悪く軟質で、底部には糸切り痕が観察できる。口縁は外反し、内面の口唇近くに一条の沈線を巡らせる。胎土分析では鳥根県東部地域（Ｃ群）の領域に類似するとの結果を得た。9は甕。2、3、6、7はピット1、9はピット2、4と5は溝内から出土。8はテラス周辺で表採した。これらの遺物は8世紀後半のものと考えられる。

ＳＳ－3（第16図）はＳＳ－1の南、一段下がった標高131.0～131.8mに位置する。奥行きは最大で5.3m。ＳＳ－1から下がったところには幅50～80cm、深さ10cmほどのＳＤ－6がある。これとやや並行するようなＳＤ－7がＤ－6とＤ－7杭の中間当たりに位置している。このテラスにピットはなく、ここがどういった機能をもっていたかは不明である。なお遺物はＳＤ－7から須恵器坏が出土している（第15図10）。底部片であるが、底面に糸切



第15図　ＳＳ－1、3出土遺物実測図



第16図　SS－1、3実測図

り痕のあるもので8世紀に相当する。またこの付近で磁器片が出土したがＳＳ－3との関連性は判断できなかった。

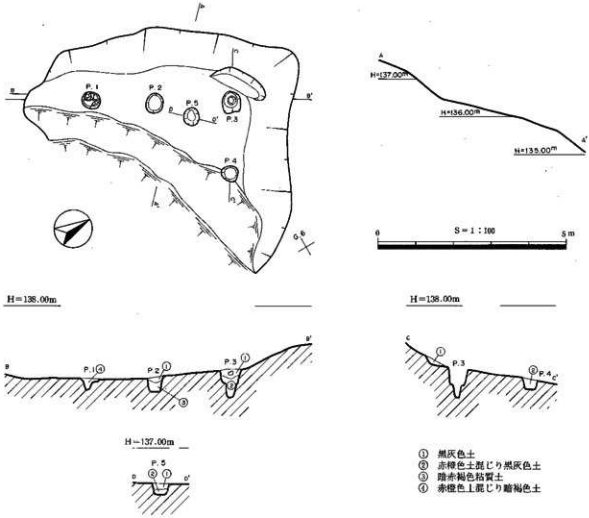
ＳＳ－2（第17図、写真図版6）はＳＳ－1の西方約13mのところにつくられている。標高は136.0～136.5mに位置する。検出した長さ約6m、奥行きは約2.3mであるが、テラス南側は削平されており、さらに規模の大きなものであったことが伺える。残存高はＡ－Ａ'ラインで約70cmを測る。床面には溝が一部残っていた。幅約45cm、深さは25cmほどある。ピットは5基検出した。その配置状況からＰ．1～3を主柱穴とする建物の存在が推測できる。Ｐ．1とＰ．2との間隔が約1.2m、Ｐ．2～3が約1.3mであった。これに直行するのがＰ．4で、Ｐ．3との距離は約1.3mとなっている。これらは平面円形を呈し直径が50～60cm、深さは約30～80cmである。遺物は出土せず、時期は特定できない。

・落とし穴状土坑（ＳＫ－11、12）及び土坑（ＳＫ－10、第18図、写真図版7）

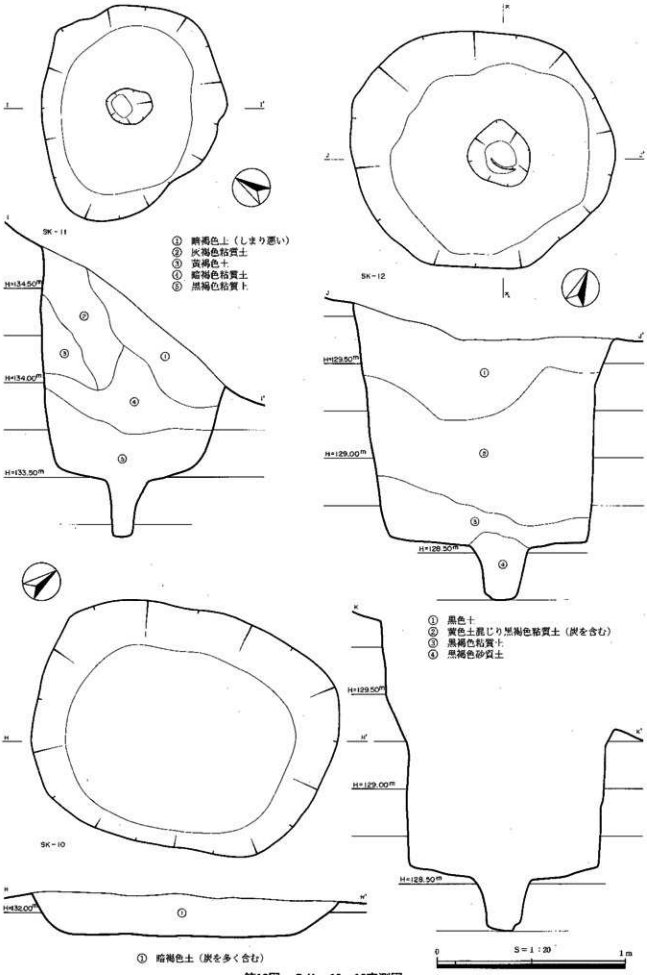
3基ある土坑はいずれも越敷山山頂への山道周辺に位置する。いずれも遺物はなく時期はわからない。

ＳＫ－10は調査区北壁に近い、その山道上にあり標高は131.9～132.3m。長軸を山道とほぼ並行に採り、長径158cm、短径127cmを測る楕円形を呈する。平面形の大きさに比べ、深さは30cmと非常に浅い。埋土は暗褐色土で炭を多く含んでいた。またこの土坑の周囲には黒色土を埋土とする長径25～35cmのピットが点在する。しかし土坑とこれらピットの関係、土坑の性格や時期については不明である。

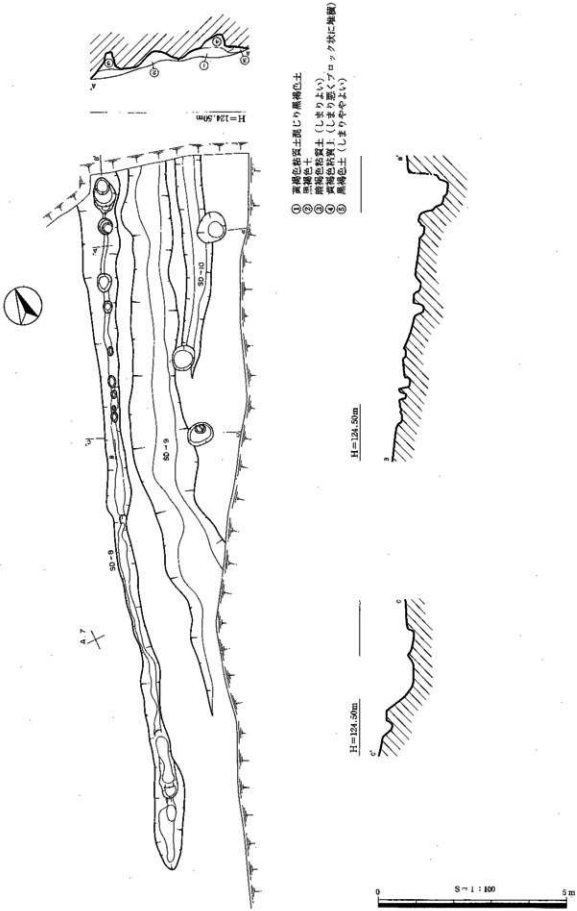
ＳＫ－11、12は底面にピットをもつもので、形態的に尾根上で検出した土坑と似ることから、これらも落とし穴状土坑とする。ＳＫ－11はＳＳ－1から斜面を北へ1mほど上がったところにあり、斜面と並行に長軸を採る。



第17図　ＳＳ－２実測図



第18図　ＳＫ－10～12実測図



第19図　ＳＤ－８～10実測図

この斜面は検出面で53度という急なものである。底面までの深さが斜面上方で123cm、下方では65cmある。平面形態は長軸110cm、短軸100cmと楕円形になる。また底部ピットの深さは30cmで、長径25cmのやや楕円形を呈する。埋土は第1層を除き、粘質でしまりのよいものであった。

ＳＫ－12はＳＳ－3の南斜面を約1m下がったところに位置し、土抗の上端は北が高く南との比高差は約60cmである。また平面形は長軸140cmのほぼ円形を呈す。深さは北側で130cmを測り、底部ピットの深さは28cmある。埋土は上層に黒色土、その下にはしまりのよい黒褐色土、最下層にはやや湿り気のある暗黒褐色粘質土が堆積していた。この2基は尾根上の落とし穴状土抗とは埋土が異なり、また立地も違う。

・溝状遺構（ＳＤ－6～11、第19～23図、写真図版5、6）

溝状遺構は調査区北東隅に位置し、ほぼ南北にはしるＳＤ－8～10（第19図）、尾根裾部中央を東西に流れるＳＤ－11（第21図）がある。

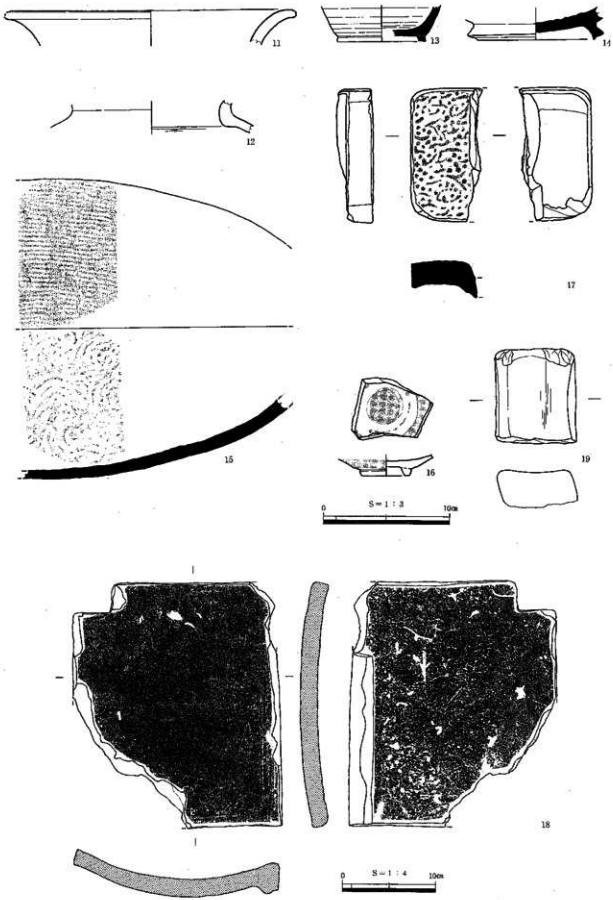
ＳＤ－8～10はＳＩ－1から東へ続くゆるやかな斜面が6mほどのところで削平され、その裾につくられている。いずれも北は調査区外へ延びていく。これらより一段下がったところには現在水田用の用水路があり、右橋下池へと注いでいる。ＳＤ－8は検出した長さが18.3mで、幅は0.4～1.5m、深さ0.2～0.4mである。この北側底面には0.2～0.6mの直径を測るピットが8基ある。柵列か。ＳＤ－9は14.5mを検出した。南はやや屈曲して調査区外へ延びる。幅約1.2m、深さは5～10cmと浅い。これに接続するものがＳＤ－10である。検出した長さ6m、幅0.6m、深さは10cmほどのものである。溝内にピットはなく、掘り込み面に直径0.7mほどのものが3基ある。この3条の溝状遺構の埋土はどれもしまりの悪い土であった。

遺物はＳＤ－8及びピット内から出土した（第20図、写真図版40）。11、12は土師器甕の口縁と頸部である。13は須恵器坏の底部で、高台が付く。底部に糸切り痕があるもので9世紀に比定できる。14は須恵質の壺甕の底部。高台をもつ。15は須恵器横瓶の胴部片。16は肥前系磁器の底部片、18世紀のものである。17は須恵質の土製品で、モチーフ不明の陽刻が施される。右側がどのような形態を採るかわからないが、硯の陸、海となるのかも知れない。18はほぼ完形の瓦質の瓦である。ＳＤ－8内ピット中より出土。19は砥石。上面と両側面を磨研する。これらは近世に混入したものと考えられる。

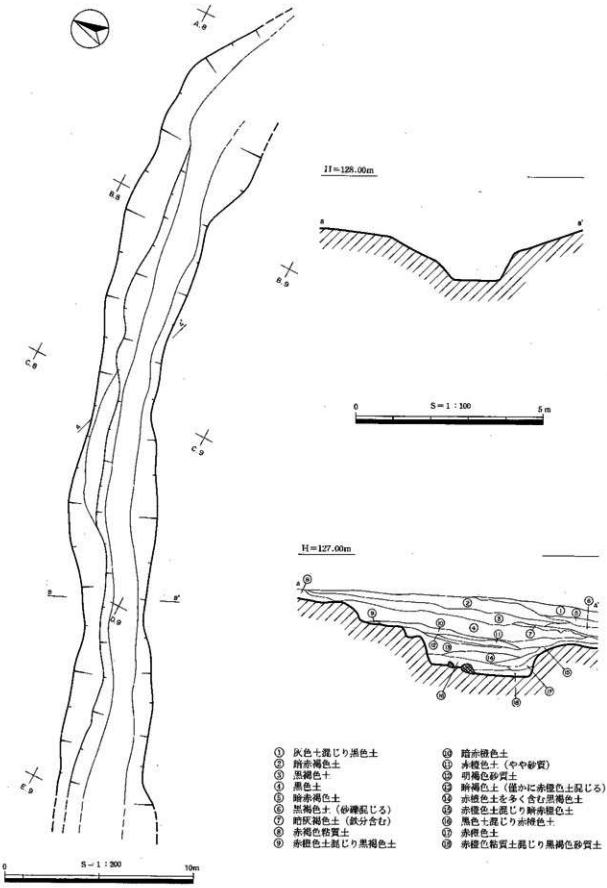
ＳＤ－11は調査区外西へ、越敷山山頂の方角から派生する谷地形に続く。ここは湧水が激しく、調査困難であったため34mにわたって検出及び完掘をしたものの、遺物の出土状況を把握するには至らなかった。幅は約5m、深さは1.3mを測る。

遺物は上層に近世、下層からは円筒埴輪や瓦片が出土した（第22、23、28～31図、写真図版39、40）。

20～25は土師器甕で23は丸底の底部片、他は口縁部片である。古墳時代後期に属する。26は甑の底部。27～32は丹塗りの土器である。28は杯、29、31、32は皿、30は高台である。27は7角形に脚部を面取りする高坏で、8世紀後半から9世紀初頭に比定できる（註7）。胎土は島根県東部地域（Ｃ群）の領域に類似する。33～38、40、41は須恵器である。33は坏で底部に糸切り痕がある。34は高台付きの坏。35～38は帝甕の口縁、頸部である。39は肥前系の磁器。高台付きの皿で18世紀のものである。40はＳＤ－11上層の黒色土から出土した完形の短頸壺である。内面は放射状タタキを施す。41は大型の有耳壺。把手が一対付き、内面は同心円タタキをのこす。42は竈である。円筒埴輪は埴質のもの（82～85、87、88）と須恵質のもの（89、90）がある。前者は器壁が厚めで粗いハケメを施す。類例として岸本町長者原14号墳出土品がある。後者は薄手で細密なハケメを施す。85は3条4段のもので、2段目に円形のスカシ孔がある。89、90もスカシ孔をもつ。須恵質なものの例として米子市陰田31号墳、淀江町向山3、4号墳、井手挟2号墳があり、これらから川西Ⅳ期に併行するものと思われる。91～98は平瓦である。凸面に92は格子目タタキ、他は縄目タタキ痕があるもの。縄目はいずれも側縁に平行してつけられる。すべて凹面に布目痕がある。厚さは2.0～2.3cmのものがほとんどで、95、96の2点のみ3.0cmと厚い。また91、92、98は胎土分析を行なった。すでに大寺廃寺の瓦については分析がなされており（註8）、そのＲｂ－Ｓｒ分布図を比較してみると98はⅡ群の小枝山瓦窯の領域に類似する。一方91、92はⅠ群の領域に類似している。



第20図　ＳＤ－７、８及び周辺出土遺物実測図



第21図　ＳＤ－11実測図

・掘立柱建物跡（ＳＢ－１、第24図、写真図版7）

掘立柱建物跡は1棟（ＳＢ－１）あり、後述するＳＩ－2が埋った後建てられた。南北に軸をとり、2間×2間を検出した。ピット間は55～75cm、Ｐ．5～7はＳＩ－1、2の礫、埋土を掘り込む。プランは50～70cmの円形を呈し、検出できた深さは25～55cmであった。遺物はなく、ＳＩ－1、2との切り合い関係から古墳時代以降であることがわかる。

・竪穴住居跡（ＳＩ－1～3、第25～27図、写真図版8、9、38）

竪穴住居跡は3棟検出し、そのうちＳＩ－1、2は建て替えである。いずれも調査区東隅、ＳＳ－3へ続く非常にゆるやかな斜面の裾部につくられる。先に建てられたＳＩ－1は標高125.8mに位置する。南東側は削平を受け遺構の範囲は不明瞭だが、残存する北西の側溝は長さ約5.3mを測り、北西－南東を軸とした、ややいびつな方形となるものであろう。確実にこの住居に伴うピットは4基（Ｐ．1～4）しか確認できなかった。

遺物は3点のみ図示できた。45は貼床直下第6層より出土。土師器坏で内面及び割れ口に煤がついている。46は丹塗りの高坏脚部で、Ｐ．1内より出土した。54はＰ．3内出土。上師器甕の底部か。内面を粗く削り、外面はナデ調整を施す。

ＳＩ－2は壊れたＳＩ－1に厚さ10cmの黄褐色粘質土を貼り、床としている。その範囲は南東へ5.5mほど拡がっていることから、それがＳＩ－1の広さを表していると推測される。北西は地山を削り、残存高で80cmの壁をつくり、その裾に深さ5cmほどの浅い側溝が巡る。北西壁の長さは7.2m。Ｐ．8、10～12を主柱穴とする4本柱の住居と思われる。床面からはケヤキの炭化材が検出され、この住居が焼失した可能性を窺わせる。

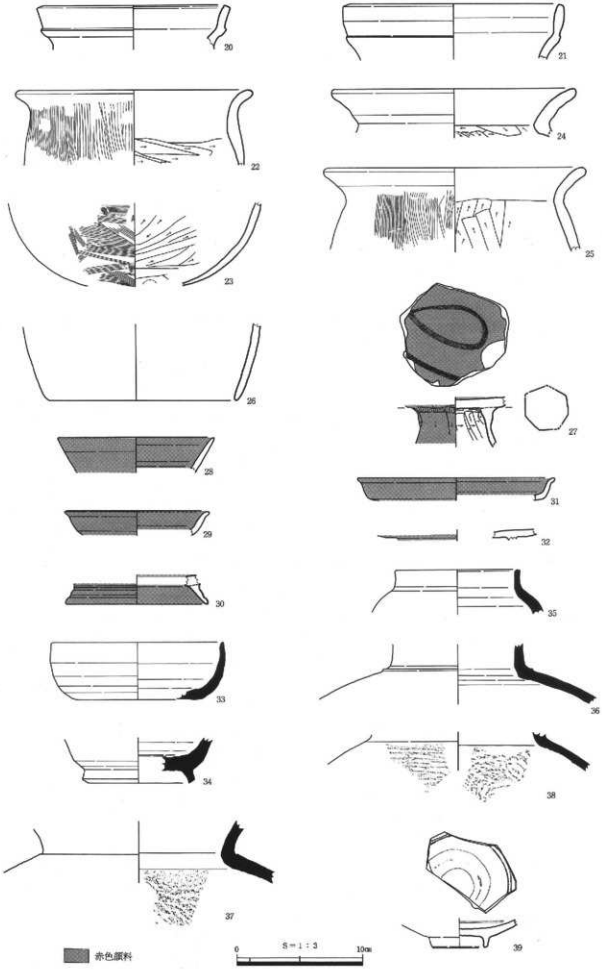
遺物は43が須恵器坏の底部。糸切り痕をもつもので第1層より出土した。ＳＳ－1からの流れ込みであろう。8世紀後半に比定できる。44、47～53、55、56は土師器である。44、47、49、50、55は第4層出十。56は貼床上で出土した。後一者は高坏の脚部である。44は坏。他は甕の口縁、頸部である。これらの内47は青木遺跡における編年（註9）のⅧ期、他はⅨ～Ⅹ期に相当すると思われる。57は敲石で、両面に敲打痕をもつ。第2層出十。石材は無斑晶安山岩である。58は角閃石斑糲岩製の磨石。第3層から出土した。

ＳＩ－3はＳＢ－1を挟んでＳＩ－1、2の南西に位置する。北壁は約4.8mを測り、その裾には2重の側溝が巡らされている。両者とも幅約25cm、深さは10cmほどのものである。ピットは6基検出したが、Ｐ．1，4，5そして攪乱を受けている部分の一本で4本柱の建物が建つと思われる。北西壁裾、側溝の上面には炭化材が多く堆積していた。これはカシ類で樹種は、地域的分布特性から判断するとウラジロガシかシラカシの可能性が大きいという。また住居内北西隅には人頭大で偏平な礫があり、焼けてさらに周辺に破片が散っていた。この住居も焼失したものであろう。なお同一面で鉄滓状の塊（64）が出十している。

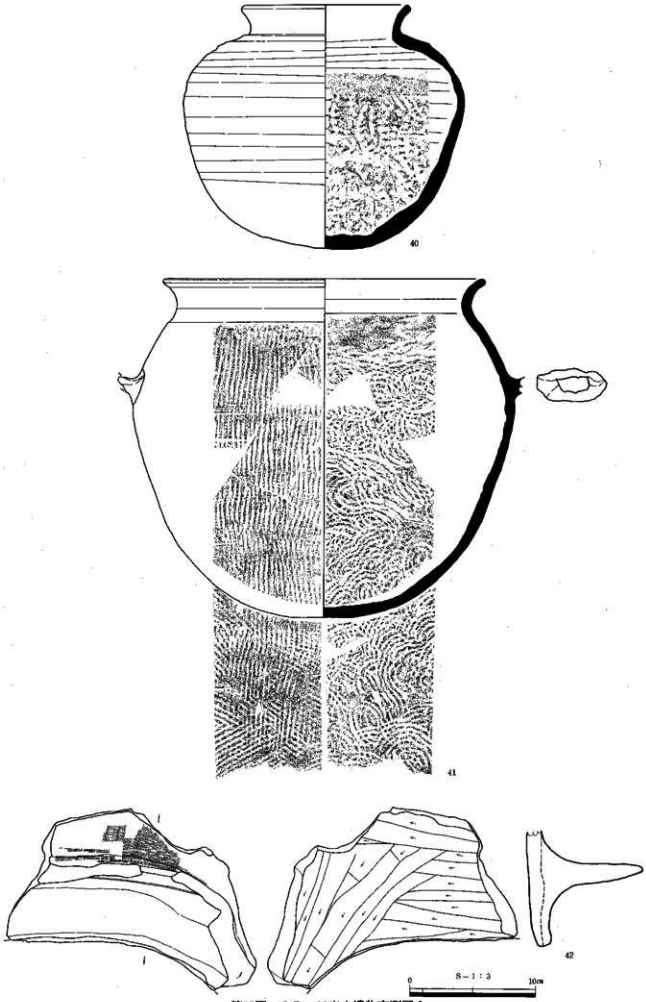
遺物は59～63の土師器がある。62は第1層、他は第3層より出十した。59は甕の底部か。外面に沈線がある。胎土は粗、色調は暗橙褐色を呈す。60は高坏底部、61は脚部。焼成良好で、橙褐色を呈する。同一固体の可能性がある。63は甕の頸部で、口縁内面に炭化物が付着する。青木編年Ⅸ～Ⅹ期に相当する。

4　遺構外の遺物（第28図）

65は縄文時代後期の粗製浅鉢である。内面はヨコナデ、外面は粗くケズリ。調査区南東部の丘陵上から出土。66、67は土師器甕の口縁部、68は高台付き皿の底部で丹塗りされている。69～74は須恵器。73は脚台、69、70は蓋である。宝珠状のつまみがつくものと思われ、島根県安来市高広遺跡の須恵器編年によるⅣＡ期（8世紀中葉～後半）に相当する（註10）。71は高台付きの皿、72は坏でこれらは底部に糸切り痕をもつ。いずれも奈良時代のもの。75は竈の底部か。76は土師質のもので、形状から稙、あるいは蓋のつまみではないかと思われる。77～79は磁器。77、78は肥前系で前者は19世紀前半の端反り形碗、後者は18世紀代の碗。79は産地、時期とも不明で、淡緑灰色を呈す灰釉のものである。80、81は黒曜石製の石鏃である。両面を丁寧に加工している。



第22図　ＳＤ－11出土遺物実測図１



第23図　ＳＤ－11出土遺物実測図２

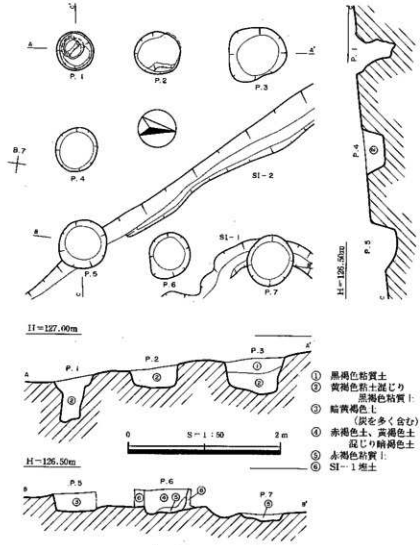
第4節　小結

・土墓状遺構について

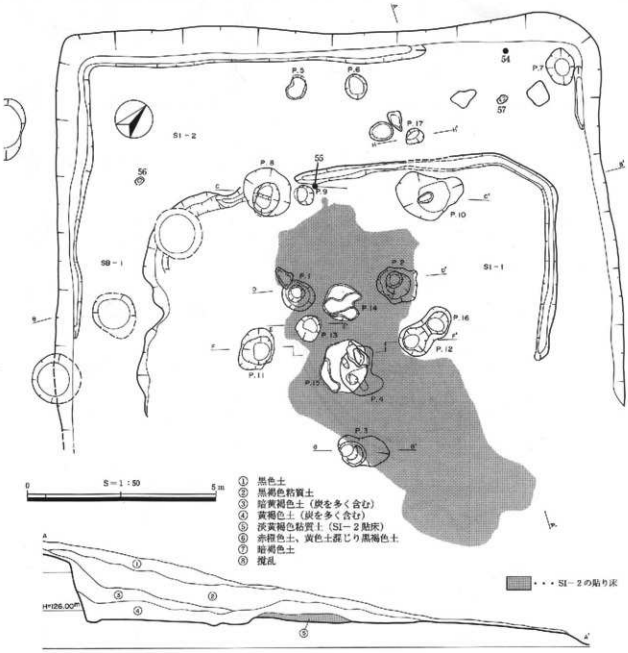
この遺構の築造時期はわからない。しかし盛土中からは円筒埴輪が出土しており、これより以降につくられたことは間違いない。表土から鉄鉄が出土しており、近世以後には存在していたことが窺える。また円筒埴輪が尾根裾部のＳＤ－11から見つかっていること、越敷山山頂から伸びる尾根上に密に分布している古墳群が、この周辺だけ希薄であることから考えて、この遺構はこれら古墳を壊してつくられたものという可能性がある。さらにその古墳の盛土を利用して土墓状遺構は築かれているのかもしれない。

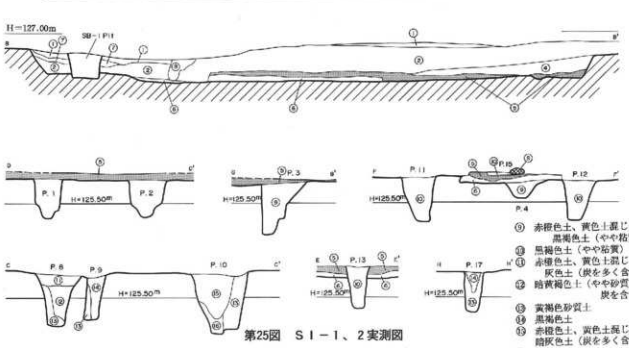
土墓状遺構下層で溝状遺構を5条（ＳＤ－1～5）検出した。これらはほぼ尾根に並行につくられていて、東側は土墓状遺構とも並行するが、それが屈曲するところで曲がらず真直に延びる。すなわち土墓状遺構の西側平坦部下をはしっている。この溝状遺構の機能についてはよくわからないが、その埋土が土墓状遺構の盛土であることからみて構築時に掘られたものではないかと思われる。そして溝状遺構と土墓状遺構の関係、屈曲部の東西における盛土の仕方や形態の違いから、最初尾根に並行して溝とともにつくられたものが、後に西側部分の上層を削り約18度南へ角度をかえてつくりなおされたと考えられる。

このように尾根頂部に並行してつくられる十墓状遺構の類例は、県内で鳥取市中尾土墓（註11）、西桂見遺跡（註12）、羽合町乳母ケ谷第2遺跡（註13）、県外は岡山駄みそのお遺跡（註14）がある。このうち西桂見と乳母ケ谷は下層に溝状遺構ももち、本遺跡例と同様な形態である。いずれの例も時期は判然とせず、県内のものは中・

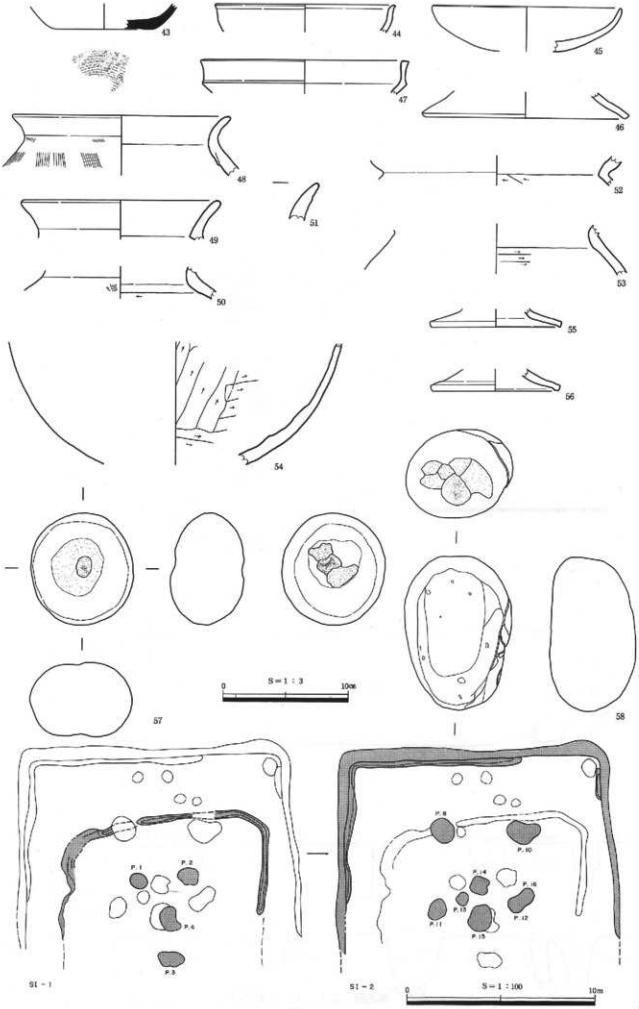


第24図　ＳＢ－１実測図

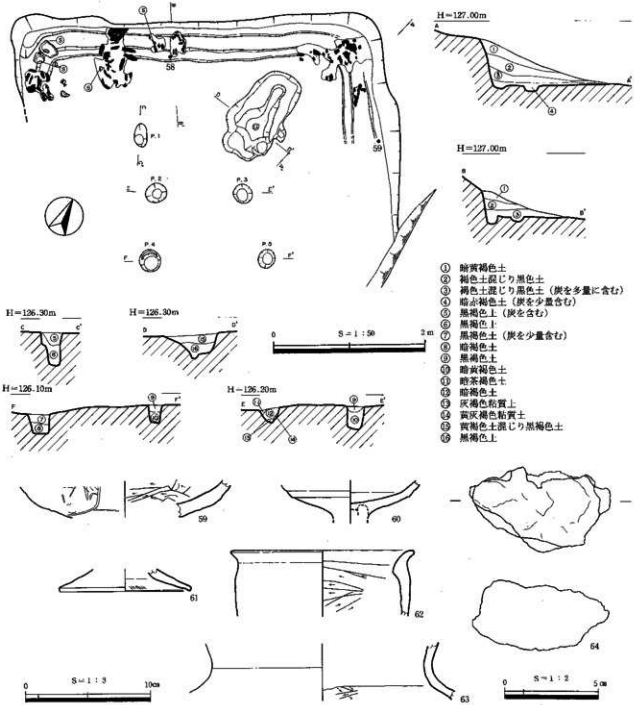




第25図　SI－1、2実測図



第26図　ＳＩ－１、２出土遺物実測図及びＳＩ－１、２の変遷図

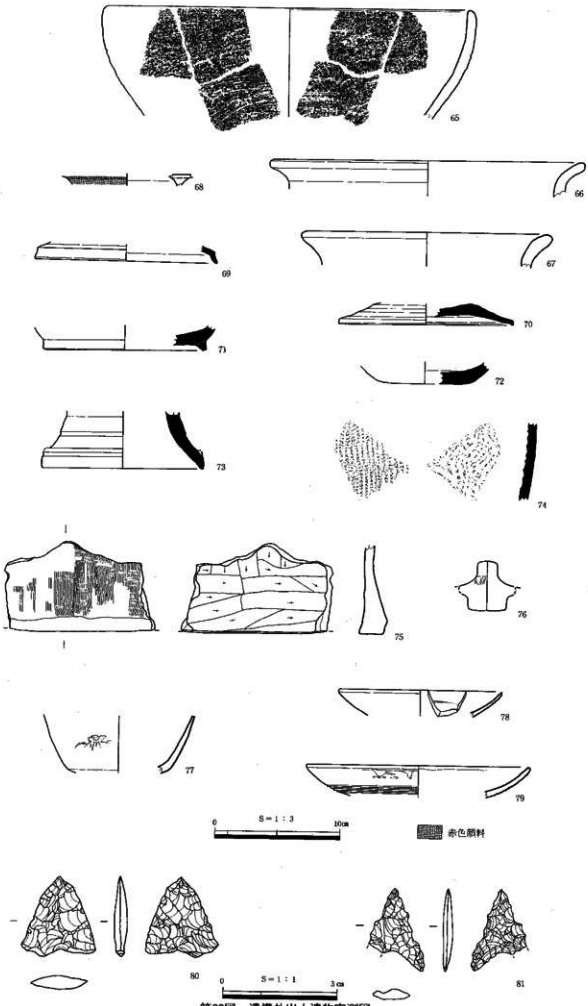


第27図　ＳＩ－３実測図及び出土遺物実測図

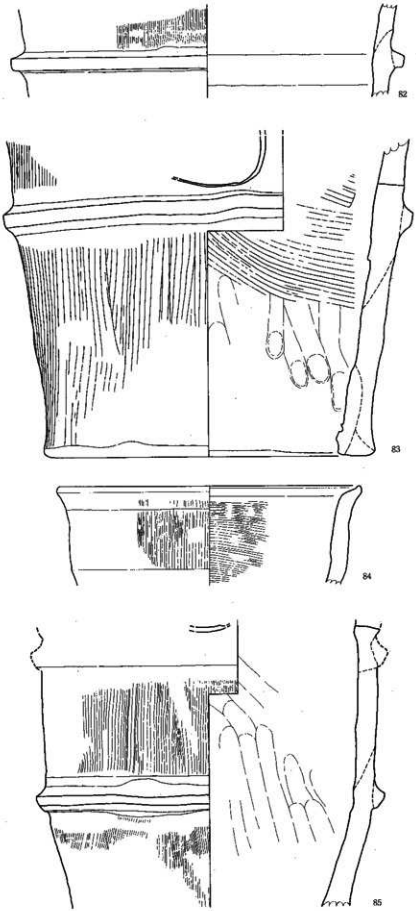
近世とされる。みそのおではその性格を古道、西桂見、乳母ケ谷例はそれら土墨状遺構を境にして字が変わることに注意を喚起しているものの、その構築があまりにも丁寧過ぎるという。本遺跡でも昭和前半期の地籍図で字をみると尾根を境に北は幡郷村大字坂長、南は同大字小町となっている。小町は明治22年から幡郷村の大字となったが、江戸時代においては小町村として独立していた。その時代入会地をめぐって村落間で争いが絶えなかったことが、いくつかの文献によって知られる（註15）。そこで境界を明確にすべくしっかりした土墨を築く必要性があり、またその後の論争で境界の変更が生じ一度つくられた土墨状遺構が角度を変えてつくり替えられたとは考えられないだろうか。いずれにせよ時期を決定し難く、また類例も少ないため推測の域を出ない。

・落とし穴状土坑について

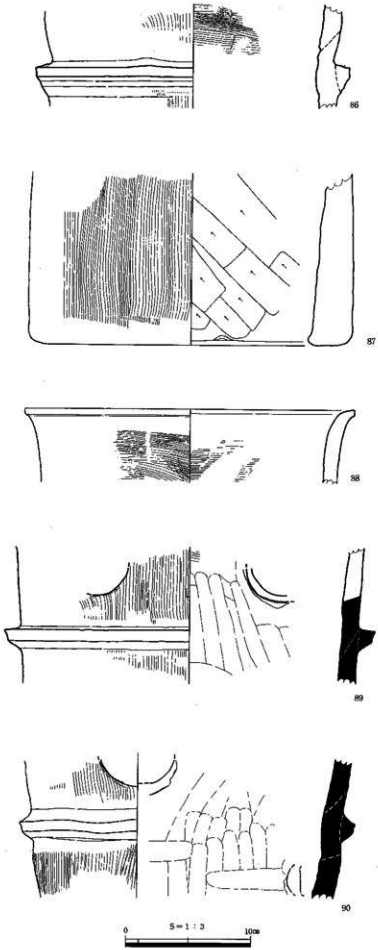
鳥取県下では、非常に多くの落とし穴状土杭が見つかっている。県内で初めて青木遺跡において確認されて以



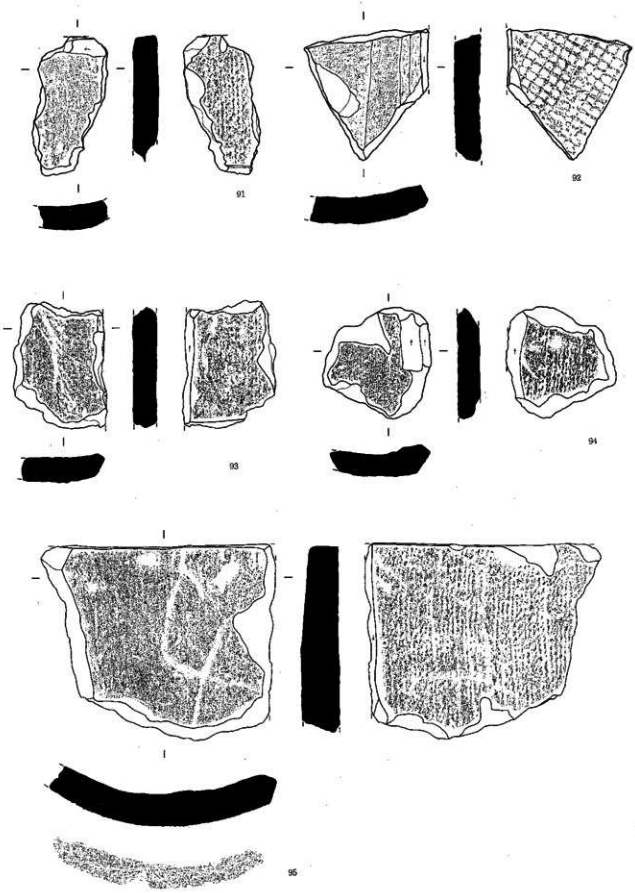
第28図　遺構外出土遺物実測図



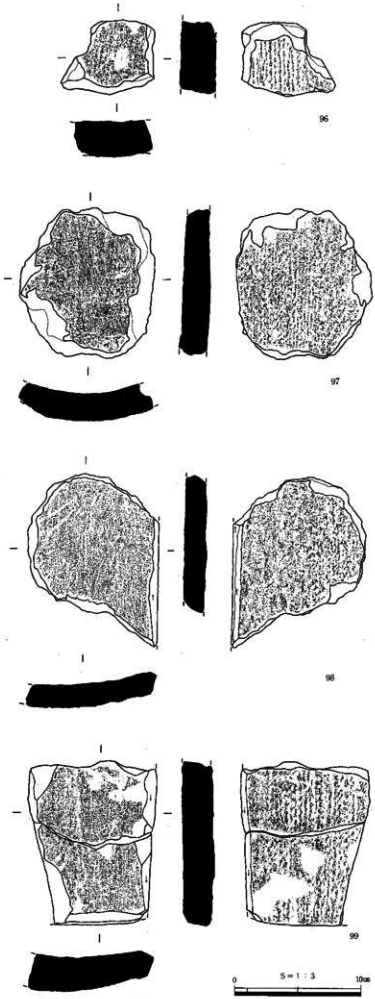
第29図　小町石横ノ上遺跡出土埴輪実測図１



第30図　小町石橋ノ上遺跡出土埴輪実測図２



第31図　小町石橋ノ上遺跡出土瓦実測図１



第32図　小町石橋ノ上遺跡出土瓦実測図２

米、土坑底部にピットをもつものは勿論、ピットをもたないが深い土坑も”落とし穴”であるとされてきている。これらは共伴する遺物がないものがほとんどであるが、一般には「縄文時代」とされ、とくに後・晩期が多い。こうした遺構の検出例は越敷山系だけで400基を越す。本遺跡でも落とし穴状土坑としたものが11基確認されたが、横浜市霧ケ丘遺跡において挙げられた特徴（註16）をもつものである。

近年の県内におけるこの土坑に対する研究動向をみると、その形態分類を行なうことと、自然科学的分析によってその性格を探ろうとするものに分けられるが、早なる遺構論に終始し、結論としてこれら土坑が「縄文時代（後・晩期）の落とし穴」であるとされるのみで、それらがつくられた社会的背景に触れられることは皆無であった。ここでは落とし穴状土坑について現状で気が付いた点に触れ、その背景に迫りたい。

まず時期についてはこの土坑に共伴する遺物がほとんどなく、越敷山系周辺では縄文晩期の突帯文土器が出土したものが越敷山遺跡群15ｄ区（註1）に、青木遺跡（註9）で後期とされるものが1基だけである。また大山山麓の淀江町百塚第７遺跡では後期の住居跡に切られた土坑がある（註17）。他は調査区内から出土した縄文土器から判断されている例が多い。遺構の切り合い関係がわかるものでは、古墳時代より新しいものは知られていない。さらに土坑内から出土した炭化物の年代測定では百塚第７遺跡で4080±80Ｂ．Ｐ．、米子市尾高御建山遺跡（註18）は3250±25Ｂ．Ｐ．、越敷野原第2遺跡で約3130年前という値がでている。

さてこうしたデ‥タを積極的に評価したとして、後期の遺物を出土している遺跡はほとんど無く、その様相が全く明らかにされていない。一方晩期では小松谷川、法勝寺川流域に遺物出土地が多く分布し、とくに晩期後葉の突帯文土器が目立つ。集落跡などは未だ発見されていないが、この地域に居住する人々が増加したことを物語っている。これらの後背地として越敷山があり、そこで狩猟活動が行なわれたことは容易に想像がつく。そしてその一環として多くの落とし穴がつくられた。これら落とし穴は土掘り具である打製石斧によって掘られたと想定される。その出土例は越敷山西麓で米子市大袋丸山遺跡（註19）、会見町枇杷塔遺跡（註20）、口朝金遺跡（註21）にみられるが、前二者では1、2点しかなく、その石器組成も不明瞭である。一方口朝金遺跡では礫石器99点中に34点（34.3%）あり、石器群の中で大きな位置を占めていることがわかる（註22）。今後これらの使用痕の分析・検討と形態的な研究によって、従来球根類や根茎類などの植物質食料採集用の土掘り具として認識されていたものと、落とし穴のような穴を掘るためのものという用途による使い分けが識別可能かもしれない。

ところで倉吉市中尾遺跡（註23）では、落とし穴状土坑内から年代測定によって早期から前期に相当する炭化材が検出された。また岡山県川上村下郷原田代遺跡にも早期の土器を含むものがある（註24）。早期の遺跡は越敷山系から日野川を隔てた大山山麓（日野川右岸）に密に分布しているが、左岸においては今のところその存在はほとんど知られていない。ただ、口朝金遺跡には前期の土器が僅かながらあり、今後検出されて行く可能性は十分にある。越敷山麓で動物遺存体が発見された遺跡はないが、中海沿岸に位置する米子市目久美遺跡（註25）や陰田第7、9遺跡（註26）など前一中期の低湿地遺跡においてイノシシとシカの遺体が見つかっていることから、早期においてもそれらを対象とした狩猟が行なわれ、落とし穴が掘られたとは考えられないだろうか。そしてその掘り具と考えられる局部磨製石斧が、越敷山遺跡群8ｂ区から出土していることもその可能性を大きくする。さらにこの石斧が出土した周辺には、硬くしまった灰色系の埋土をもつ落とし穴状遺構が主として分布していて、黒色土を基本とするものが多い越敷山遺跡群において「特異な存在」（註1）とされている。小町第１遺跡（註27）ではこの灰色系の土坑を切って黒色土系のものがつくられており、その新旧関係も明かとなった。こうした状況を踏まえると、灰色系のよくしまった土をもつものは早期に、黒色土は晩期にそれぞれ比定できるのではないだろうか。今後これら埋土の土壌学的な検討も必要となってこよう。

（註１）　『越敷山遺跡群』　会見町教育委員会、岸本町教育委員会　1994年
（註２）　『大寺廃寺発掘調査報告書』Ⅱ　鳥取県教育委員会　1967年
（註３）　『長者原遺跡群発掘調査報告書』　岸本町教育委員会　1982年
（註４）　『歴史時代の鳥取県』　150～151頁　鳥取県埋蔵文化財センター　1989年

(註５)　『岸本町内遺跡発掘調査報告書』岸本町教育委員会　1996年

(註６)　川西宏幸　「円筒埴輪総論」　『考古学雑誌』第64巻第2号　1978年

(註７)　周辺では日野川右岸の久古第3遺跡（久古地区）と下野原遺跡でそれぞれ1点ずつ出土している。

(註８)　三辻利一　「蛍光Ｘ線分析」『上淀廃寺』112～117頁　淀江町教育委員会　1995年

(註９)　『青木遺跡発掘調査報告書』Ⅲ 青木遺跡発掘調査団　1978年

(註10)　『高広遺跡発掘調査報告書』島根県教育委員会　1984年

(註11)　『円護寺遺跡群』鳥取県教育文化財団　1983年

(註12)　『西桂見遺跡・倉見古墳群』鳥取県教育文化財団　1996年

(註13)　『南谷ヒジリ遺跡他』鳥取県教育文化財団　1991年

(註14)　『みそのお遺跡』岡山県教育委員会　1993年

(註15)　『岸本町誌』313～318頁　岸本町誌編さん委員会　1983年

(註16)　今村啓爾　「霧ケ丘遺跡の土壌群に関する考察」『霧ケ丘』131～154頁　霧ケ丘遺跡調査団 1973年

(註17)　『百塚第7遺跡(8区)』鳥取県教育文化財団　1995年

(註18)　『尾高御建山遺跡・尾高古墳群』　鳥取県教育文化財団　1994年

(註19)　『大袋丸山遺跡発掘調査報告書』　米子市教育委員会　1991年

(註20)　『枇杷塔遺跡発掘調査報告書』　会見町教育委員会　1987年

(註21)　『口朝金遺跡発掘調査報告書』　会見町教育委員会　1988年

(註22)　会見町教育委員会のご厚意により実見させていただいた。

(註23)　『中尾遺跡発掘調査報告書』　倉吉市教育委員会　1992年

(註24)　稲田孝司　「西日本の縄文時代落し穴類」　『論苑考古学』　天山舎　1993年

(註25)　『目久美遺跡』　米子市教育委員会　1986年

(註26)　『陰田』　米子市教育委員会　1984年

(註27)　『小町第1遺跡』　鳥取県教育文化財団　1996年